昭和47年２月６日発行通巻46号（毎日曜日発行）　昭和46年２月５日国鉄首都特別扱承認雑誌第516号

朝日＝ラルース

2/6
220円
46

週刊 世界動物百科



朝日新聞社

読者のみなさまへ

こんな動物が登場します　動物を機械的に五十音順に並べたものではありません。系統だった分類に従って，われわれの親しみやすいサル類から始め，次の順序と冊数でお届けしています。概説(２)，哺乳類(62)，鳥類(64)，爬虫・両生類(16)，魚類(16)，軟体動物・昆虫類・甲殻類・腔腸動物などの無脊椎動物(32)。《１～64号の内容は表３参照》

総目次と総索引がつきます　見て，読んで，楽しむ〝百科〞としてだけではなく，引いて調べる〝事典〞としての機能を完全にするため，16冊ごとにその総目次をつけ，また最終192号には詳細な総索引をつけます。この両者によって，動物界の構成がひと目で理解でき，調べたい動物がすぐ引きだせます。

『私たちの仲間』のページ　カラーページをより理解しやすいものにするため，日本の第一線動物学者の執筆による解説や注があります。また〝動物週刊誌〞として，動物界のニュースや話題，楽しい読物，実用記事などを掲載しています。

ファイルで保存してください　全192冊を，発行順に16冊ずつ，美しいファイル（販売中・定価600円）に，とじこんでください。堅牢で豪華な，全12巻の〝動物百科事典〞がそろいます。途中から購読されたかたは，ぜひ第１号からおそろえください。バックナンバーのお求めは，このページ右欄『本誌の購読について』をごらんください。

目次

世界動物百科　第46号

カラーページ

偶蹄目 シカ・ウシ亜目
ウシ科 ヤギ亜科
ヤギ属(つづき)
ヤギ（飼育種） 7
アンゴラ種 8
カシミール種 9
ジャコウウシ属 22
ジャコウウシ 22
カモシカ属 25
ニホンカモシカ 25

表紙　ヤギ　Ph. Tremellat-Images et Textes
表３　**ギャラリー**　サン・ロマーノの戦い　高階秀爾

監修　野澤　謙（京都大学教授）
小原秀雄（女子栄養大学教授）
翻訳　中村三郎（早稲田大学助教授）

私たちの仲間

オオカミの挽歌　藤原英司　3
２　毒と罠と銃声と

ソ連の動物園を訪ねて　広崎芳次　6

カラーページ解説　野澤　謙　27
日本とその周辺の在来ヤギ

穴と匂いの周辺　畑　正憲　28
ヒグマと２人のイノシシ 43

十二支の話 2　竹内照夫　29
子（ねずみ）

読者のアルバム 9　30
スイスのデパートで

ペット相談室・仲間のひろば・裏表紙説明

凡　例
□本文中〔 〕を使ったものは，日本版のために付加した説明である。
□くわしい注釈が必要なものには，その語のあとに〔注１〕と番号を入れ，『私たちの仲間』第27ページに，同番号で記載した。
□動物の種名は，原則として和名（一般に通用している外来語を含む），学名（イタリック）の順で表記した。
和名の多いものについては，併記したものもあるが，専門家と相談のうえ編集部で決定した。
和名のないものは，英名または仏名をカナ書きで入れ，原語（ローマン）を付記した。
□人名，地名は，本人または，現地読みを原則としたが，慣用の固定しているものはそれに従った。

本誌の購読について
本誌は，全国の書店，朝日新聞販売店で取り扱っております。
毎週定期的に，配達をご希望されるかたは，お近くの，取扱店にお申込み下さい。
なお，本社直接購入のご希望は，下記あてお申込みを願います。送料は，１部につき30円です。
朝日新聞東京本社出版業務部
東京都千代田区有楽町2－3　〒100 TEL 03－212－0131
朝日新聞大阪本社出版業務部
大阪市北区中之島３－３　〒530 TEL 06－231－0131
朝日新聞西部本社販売部出版業務課
北九州市小倉区砂津1－12－1　〒802 TEL 093－53－1131
朝日新聞名古屋本社販売部出版業務係
名古屋市中区栄１－３－３　〒460 TEL052－231－8131

次号予告
2月2日発売



世界動物百科
47号　2／13

カラーページ
偶蹄目 シカ・ウシ亜目
□ウシ科 ヤギ亜科(つづき)
シャモア属　シャモア
シロイワヤギ属　シロイワヤギ
サイガ属　サイガ
ブラックバック亜科
スプリングボック属　スプリングボック
ガゼル属　ドルカスガゼル
チベットガゼル属　チベットガゼル
モウコガゼル
インパラ属　インパラ

私たちの仲間
消えていく野生の叫び　藤原英司
オオカミの挽歌 3
〈アイラインの生物学〉上
内気なアイライン　G.5プラス1
もうひとつの世界 29
漢字のふるさと 34　藤堂明保
羚（れいよう）
レイヨウとは何か　今泉吉典
カラーページ解説
袋の安全性　畑　正憲
ヒグマと２人のイノシシ 44
丑（うし）
十二支の話 3

オオカミの挽歌

藤原英司

2　毒と罠と銃声と

オオカミに対する不当な恐怖は，このように古くから人々の間にできあがったが，人々がオオカミを目の仇(かたき)にした原因は，やはり，自分たちの財産を侵害されるということにあった。

アメリカ史の4分の3はオオカミとの戦いであるといわれるが，まず最初に戦いの口火がきられたのがバージニアとマサチューセッツだった。それは，これらの土地がもっとも早く開拓されだしたのと，ウシや他の家畜がこれらの地域へ，早くからもちこまれたためだった。はじめ開拓民は猟犬を飼い，落とし穴を掘ってオオカミに対抗した。

1600年代のバージニアでは，タバコの葉が通貨として通用したが，やがてこのタバコの葉を見返りとして，オオカミ狩りが奨励されることになった。つまり，アメリカにおける賞金の始まりである。その後この習慣はおよそ1世紀半つづき，バージニアでは1744年になってから，初めて賞金が現金で支払われるようになった。その値は，年とった大きいオオカミが1頭6シリング，子どものオオカミが1頭2シリング6ペンスだった。

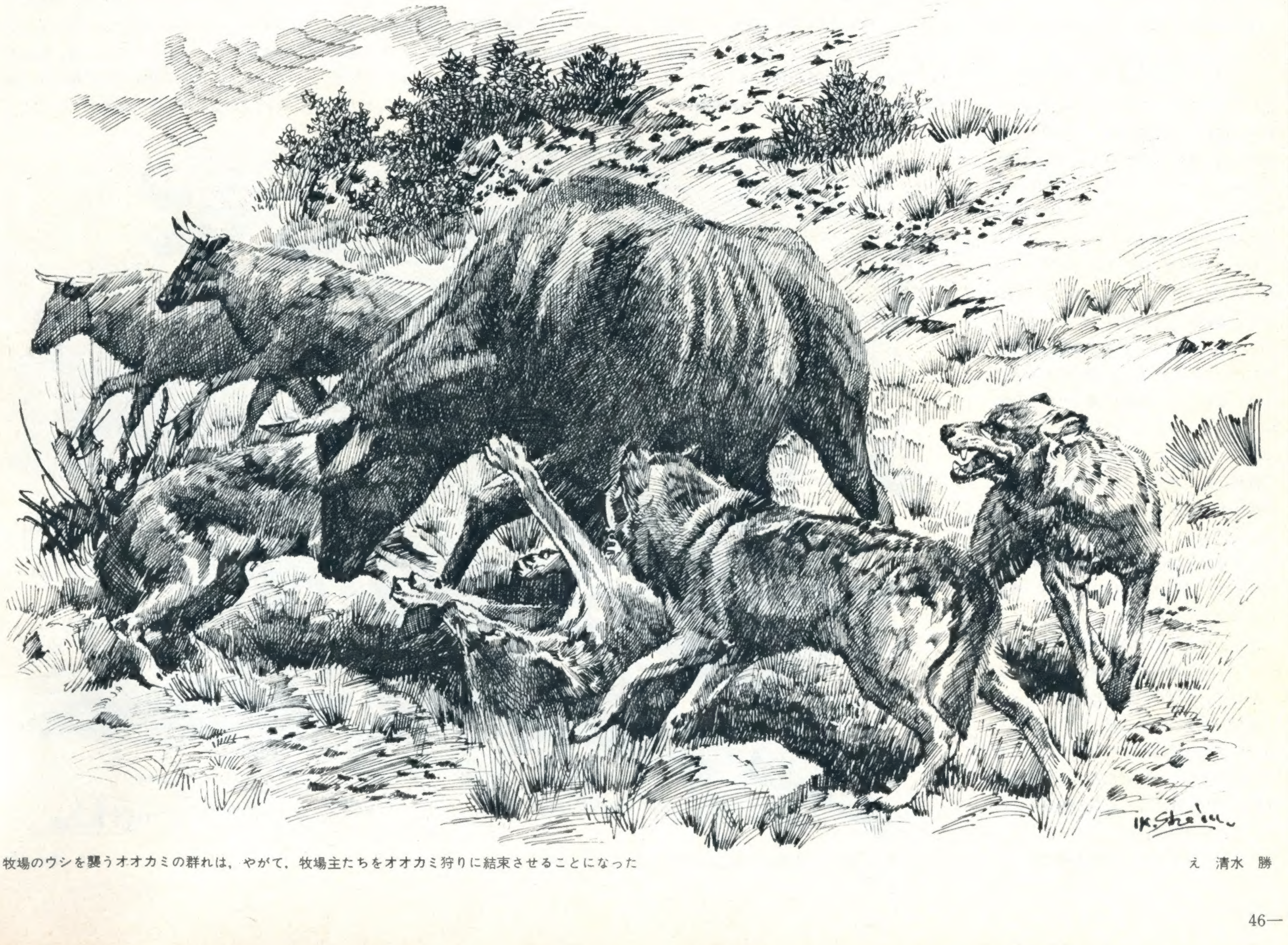
これらの賞金は，はじめのうち，いずれも地域社会での共同資金から支払われた。しかし，賞金制を法律化してオオカミ撃滅にのりだすのに，てまはかからなかった。マサチューセッツ州のプリマス植民地では，他州にさきがけて1630年に，アメリカ最初の賞金法が成立した。その2年後には，バージニアで法律ができた。また，ニューヨークで賞金によるオオカミ撃滅法ができたのは1683年，ニュージャージーでは1702年だった。こうしてオオカミは，新大陸で初めて，賞金を払って殺しを奨励する動物となった。

人間たちの反撃

オオカミの毒殺には，主にストリキニーネが使われた。ストリキニーネはフジウツギ科のマチン（馬銭）という植物の種からつくる。この実は直径2センチ5ミリほどの丸い実で真中がへこみ，まるでボタンのように見える。マチンは学名を *Strychnos nux-vomica* というが，後半のナックスはナット（実），ボミカは〝吐く〟という意味で，この植物が毒性を備えていることを示している。

毒薬としてのストリキニーネの効果は大きく，ジョージ・ブラウンが書き残した記録によると，カンザス平原でバイソン1頭の死体にこの毒薬を仕込んだところ，オオカミ13頭，コヨーテ15頭，スカンク4頭が死んだという。

西部の牧場では，カウボーイがオオカミの毒殺をしょっちゅうやった。それは畑をつくる農夫が害虫を殺す感覚と変わりなかった。毒餌(どくえさ)をわんさと作って，延



牧場のウシを襲うオオカミの群れは，やがて，牧場主たちをオオカミ狩りに結束させることになった　　え　清水　勝

延50キロにわたって点々とばらまいたカウボーイもいた。しかし，オオカミはたくましい生命力と，新しい環境に対する適応力を発揮して，いたるところで白人たちにゲリラ戦をいどみ続けた。

そのため，西部の牧場地帯では，いつのまにか，牧童仲間に不文の掟ができあがった。それは外を歩いていて，動物の死骸を見つけたら，必ず毒を仕込むことというものだった。だから，かれらはいつもストリキニーネを携帯した。州によってはストリキニーネを，希望者に無料配布するところもあった。

こうして白人がやたらにふりまく毒は，自然界に大恐慌をまきおこした。毒で死ぬのは，オオカミだけに限らなかったからである。コヨーテ，キツネ，スカンクはいうにおよばず，クマやピューマ，ヤマネコなど，およそ肉を食料とするすべての動物に被害がおよんだ。だから記録に残ったものはオオカミの毒殺であっても，そのかげにはまきぞえをくって非業の死をとげた動物が無数にあった。また，実際に記録に残ったオオカミの毒殺頭数は，人間の目にふれたものだけを数えている。従って，現場から遠く逃れて絶命したオオカミを計算にいれると，毒殺されたオオカミの総数は2倍にのぼるだろうといわれる。

毒の影響はそれだけではなかった。毒をのんで死にかかった動物が苦しまぎれにたらすよだれが，ほうぼうの草についた。それはやがて日光でかわくが，よだれに含まれていた毒はそのまま残る。しかも，その効力は何か月も，時には何年も持続した。そして，プロングホーンやバイソン，ウマ，ウシ，ヒツジなどが，その草をたべて絶命した。

やがて白人は，毒殺したオオカミより罠で殺したオオカミのほうが，毛皮の艶がずっといいことに気がついた。ちょうどその頃，ニューハウスの鉄罠が大量生産にはいった。そこで鉄罠の売れゆきが伸び，毒の使用が大幅に減るという現象が起こった。しかしいずれにしても，オオカミの受難は軽減されなかった。

鉄罠が広く普及しても，罠師がそれを利用するには限度があった。罠が重かったからである。オオカミ罠は1個だいたい2キロの重量があった。そのため，1回にかついでいける数は，せいぜい6個から10個どまりだった。

ところがワイヤ・スネアは，針金で輪を作って獣の通り道に仕掛ければいいものなので，かなりの数を持ち歩くことができた。資本がかからず，安直に作れる上に，冬でも楽にかけられたので，この罠に首を突っこんで果てるオオカミは絶えなかった。オオカミ以外の動物も，むろんこの被害を受けた。

ワイヤ・スネアは，世界各地でずいぶん昔から使われてきた。最初はおそらく天然のツル草にからまった動物を見て，ヒントを得たものにちがいない。この罠は，かかった動物の首をじわじわとしめていく。あるいは足を捕え皮を破り，肉にくいこみ骨を削ってもまだ放さず，かかった動物は激痛と飢えのため，徐々に死に追いやられるというもので，虎ばさみ型の罠におとらず残酷なものである。

〝死の商人〟の誕生

アメリカで鉄罠が工業化されたのは，1823年である。これはちょうど1人の少年が17歳の誕生日を迎えた年と一致する。そして，アメリカの野獣が罠に倒れていった歴史をさかのぼっていくと，必ずゆきつくところが，この少年の生い立ちの物語である。

その少年はシューアル・ニューハウスといい，当時，両親とともにニューヨーク州のオネイダ郡に住んでいた。生まれつき器用な子で，14歳ごろから罠や鉄砲を作り始め，17歳になった時，50個の罠を作った。彼はこの罠を1シーズン使ったあと，近所のイロコイ族インディアンに売り払った。50個というまとまった数がつくられ，それが売りさばかれたということで，これがアメリカにおける鉄罠工業の起源とみられている。

シューアルはその後も罠をつくり続け，やがてシューアルが属している部落は，部落の財産で罠工場をつくった。むろん製品の検査や，いっさいの監督はシューアルが一手にひきうけた。罠の評判は上々だった。そして西部の毛皮取引きが活発化するにつれて，罠の注文はどんどん増えた。1850年のシカゴ地区を皮切りとして1855年ウィスコンシンへ，1857年カナダのオタワに，ミネソタとアイオワに1859年というふうに，シューアル・ニューハウスの作った〝ニューハウス〟ブランドの罠は，販売先をひろげていった。

ニューハウス工場の罠は飛躍的に伸び，1869年までに136トンの鉄を消費した。そして1861年から69年にいたる8年間に，75万個を越える罠を生産した。その後，ニューハウスの仕事は順調に発展し，ついにアメリカ最大の鉄罠製造会社，アニマル・トラップ・カンパニー・オブ・アメリカに成長した。

この会社は今でも操業をつづけているが，それは1806年，アメリカの片田舎に生まれた子供の生い立ちから始まったのである。

シューアルは1865年に，初めて罠のかけかたを解説した手引書を出版した。それは当時の罠師のバイブルといわれ，また多くの新しい罠師が，その手引書に導かれて誕生した。

組織される住民の〝自衛〟

コロンビア河の南にひろがるオレゴン州に入植した人々は，特にオオカミの被害に悩んだ。このためいたるところで〝寄り合い〟が開かれ，オオカミに対する防護策が協議された。これがいわゆるオレゴン・ウルフ・ミーティング（オレゴン州オオカミ集会）といわれるもので，のちに州の自治政府が誕生する母体となった。

やがて1843年になると，個々ばらばらの集会ではなく，関係者を一堂に集めて対策をねろうという動きが起こった。そして3月4日に，本格的な集会が開かれた。相談は順調にはかどり，結局，皆で家畜を保護するための協議会をつくっておき，そこに資金をプールして，賞金をだし，オオカミ狩りを奨励しようということになった。この協議会はウルフ・アソシエーション，またはウルフ・オーガニゼーションといわれ，オオカミや他の野獣から家畜を守る機能をもった有力な市民の運営機関となった。

ところで当時，牧牛はもうかる仕事だった。ウシはほったらかしておいても，7年たてば自然に2倍になるといわれ，西部の男たちのあいだで，放牧業はボナンザ・ビジネス（巨利をもたらす事業）といわれた。しかしそれだけに，牧畜業者にとっては，オオカミは頭痛の種だった。

確かにオオカミは牧畜業の敵であった。だが，オオカミにウシを襲わせたのは，元をただせば白人だった。白人たちはオオカミの天然の餌であったバイソンを掃討した。いわばオオカミは，白人たちによって日常の糧を不当に奪い去られたのである。その点ではオオカミとイン



新式の鉄罠に捕えられたオオカミは，ただ死を待つしかなかった　　え 清水 勝

ディアンは共通の被害者であったといえる。そしてインディアンは白人そのものを攻撃したのにひきかえ，オオカミは白人の持物である家畜を襲った。インディアンの自衛手段が，侵略者に対する正当防衛であったことを認めるなら，オオカミの家畜殺しも，当然，食料を奪われたものの正当な行為であり，かつ環境に適応していくための唯一の手段であったことを認めなくてはならない。

しかし，白人たちはもうけを少しでもそこなわれるのはいやだった。がっちりとがめつく，全部をかかえこみたがったのである。かれらの間には，当時，先住民や動物と調和して生活しようという気持は認められなかった。

コロラドの牧畜業者は，1870年に，アメリカで最初のストック・アソシエーション（家畜組合）をつくった。この組合で，オオカミの賞金は1頭あたり4ドル50セントと定められ，賞金や毒薬用の財源は，組合員のウシの保有頭数に従って組合から拠出されることになった。

オレゴンやコロラドのこうした民間団体の賞金規定は，のちに郡の規定となり，やがては西部の州法に発展する原型となった。

連邦政府による大作戦

新天地に渡った開拓民には，貧しい人たちが多かった。なかには農耕で身をたてるつもりで入植しながら，鍬や鋤さえ満足にととのえられない人たちもいた。だが，オオカミを殺してかせぐのには，たいして資本がいらなかった。またいったんオオカミを殺せば，賞金と毛皮の売却の両方で，時には二重にも三重にもかせぐことができた。オオカミ殺しは，もうけのいい牧畜業に付随して発生した仕事だったが，やがてそれが立派に独立したもうかる仕事となった。そのため1年じゅうオオカミ殺しを商売にする男たちが現われた。つまりプロ・ハンターの出現であるが，それらの男たちは，一般に〝プロフェッショナル・ウルファー〟（専門にオオカミをとる人）と呼ばれた。かれらは，ロッキー山脈地帯では，食事と寝る場所にただでありつくことができた。また1900年代に入ると，オオカミの賞金は1頭50ドルにはねあがった。そしてこの50ドルという基本賞金のほかに，さらに郡，州，家畜組合などからの賞金を受けとり，毛皮の売却代金も手にいれることができた。このため，1900年代になってオオカミの捕獲数がおちたとはいえ，オオカミ猟師の生活は比較的楽なものだった。

アメリカの開拓が進むにつれて，オオカミはしだいに西と北へ追われた。しかし，オオカミの減りかたより，牧畜業の発展のほうが急速だったので，オオカミによる被害は，いたるところで頻発した。そして，オオカミの被害に関する苦情が，各地から連邦政府の農林省へ寄せられるようになった。

その代表的なものは1896年4月3日に書かれたR・M・アレンの手紙と，翌1897年12月26日に農林省へ宛てられたアーサー・J・ティズドルの手紙である。この2通の書翰は，オオカミ問題が初めて連邦政府へもちこまれたものとして，歴史的な意味をもっている。だが，オオカミの場合は，バイソンやリョコウバトの問題が政府へもちこまれたのとちがって，正反対の目的のためだった。つまり，連邦政府の力によって，より一層，殺戮を強化しようというのがねらいだったのである。

民間の苦情が高まるにつれて，連邦政府としても黙っていられなくなった。そこで政府は，農林省の生物調査局から調査員を各地に派遣して実情調査にのりだした。そして1907年から1909年にかけて，続々とオオカミに関する各種の調査報告が発表された。それによると西部諸州では，オオカミによる被害が毎年数百万ドルにのぼることがわかった。

いっぽう，各種の報告が連邦政府からだされるようになると，国民の間に，オオカミ問題は政府がなんとかすべきだという機運が，しだいに高まっていった。そのころ政府は，西部諸州に多くの国有林をもっていた。そして，牧場主はその国有林へ自分たちの家畜を入れて草を食べさせ，政府に放牧費を払っていた。ところが，そういう森には，どこでもオオカミがたくさんいた。


テキサス産のアカオオカミ　撮影 Hal Swiggett 提供 Interior Bureau of Sport Fisheries & Wildlife

オオカミの害は，政府がなんとかすべきものという考えが一般化するにつれて，国有林で家畜に草を食べさせている牧場主たちの間に不満がつのった。オオカミがうようよいる森を賃貸しするとはずうずうしい話だと考えだしたのだ。こうした声が高まるにつれて，個人や組合ベースだった賞金制は，しだいに郡や州が肩がわりするようになり，オオカミ対策を連邦規模で推進する気運は，ますます高まっていった。

こうして1914年7月30日に，議会はオオカミとプレリー・ドッグを含む有害動物の駆除に，連邦予算を支出する議案を可決した。そして翌年7月1日に，政府は，初めて，12万5000ドルの予算を計上し，いよいよ本格的なオオカミ撃滅作戦が展開されることになった。

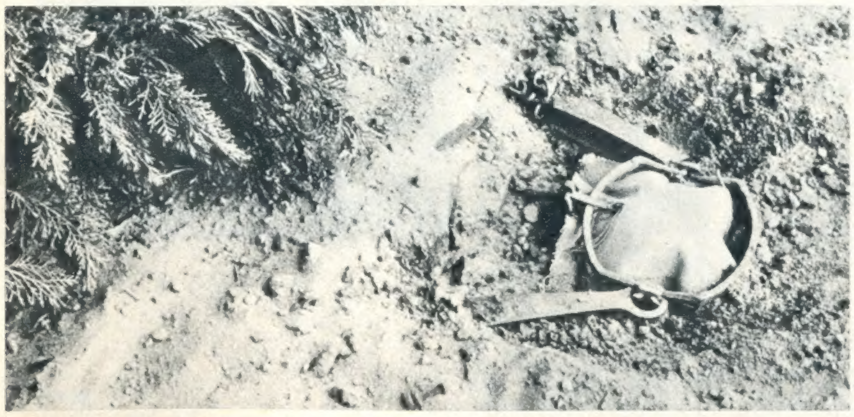
政府はまず，オオカミの多い西部の11州を8地区に分け，重点的にその地域をねらいうちにしていくことにした。この予算が通るまで，政府は各地の営林署員に，国有林での罠かけをやらせていた。しかし他の作業との兼業では，どうも効果があがらない。そこで政府は，オオカミ狩りを専業とするガバメント・ハンター（政府がやとった猟師）の採用にふみきった。ダコタ州でカスター・ウルフを討ちとったウィリアムズは，このガバメント・ハンターの1人だった。かれらは一名，フェデラル・ハンター（連邦政府の猟師）とも呼ばれ，かなりの高給をもって遇された。そのかわりいずれも四六時中，オオカミ狩りに従事し，狩りとったオオカミに対する賞金を受けとることは禁止された。また，毛皮として売れそうなものは，いったん政府の財産としてストックし，のちに競売にかけて，その収益をすべて連邦政府の収入に計上した。

オオカミ問題や農業上の〝有害動物〟については，バイソンやリョコウバトの場合とちがって，世間の圧倒的多数が，殺すことを支持した。農業団体，牧畜団体，家禽関係の団体，そして殺すことには終始大賛成のスポーツ銃猟界，さらに商工会議所までが，オオカミを殺すことを全面的に支持した。そして，オオカミの殺し屋であるガバメント・ハンターは，ある時は子供たちの英雄となり，また政府が派遣した人ということで，人々の尊敬をかちとった。同時にそれは，〝じゃまな生物は殺してよい〟とするかれらの哲学を，いっそう強化する原動力ともなった。

ガバメント・ハンターの銃声に，人々は正義の響きを聞いた。罠にはさまれ，毒に悶絶する野獣の声に，新しい世界の夜明けが近づいたことを確信した。そして新しい世界を迎えるために，人々もまた，あらゆる協力を惜しまなかった。

オオカミの撃滅が進行するにつれて，各方面から，もっと徹底的に早くやれという声が強まり，1931年には，年間100万ドルを支出しようという議決を，フーバー大統領が承認した。

効果は着々とあらわれた。頑強に抵抗したオオカミたちも，1937年には，アラスカと，他の12州以外のところで，つぎつぎと姿を消した。政府はこれを害獣対策の〝成功〟と呼び，オオカミに対する賞金を規定した州法は，順次廃止されていった。■


オオカミ用の鉄罠の一種　提供 Interior Bureau of Sport Fisheries & Wildlife



モスクワ動物園のセイウチ　後ろが隔離用のおり

ソ連の動物園を訪ねて

広崎芳次



レニングラード動物園の園内風景　正面はサルのおり

ソ連には26の動物園があり，そのなかで1864年に開園したモスクワの動物園がもっとも古く，入場者も年間300万人を数えるという。

ソ連の三大都市といえば，モスクワ，レニングラード，キエフであるが，動物園もこれらの都市にあるものがもっとも著名で，ソ連の代表的動物園ということができる。水族館はとりあげるほどのものはまだ見あたらない。

《モスクワ動物園》

動物園の門をくぐると，まるい形の大きな池がある。この池でスケートをした話が，トルストイの『アンナ・カレーニナ』に出ているが，そのことが不自然に感じられないほどの古典的な動物園であることが，園内の檻(おり)のようすなどからうかがい知ることができた。

北極の氷の海にすみソ連の動物を代表するセイウチは，ソ連じゅうの動物園でただ1頭しか飼育されていないが，それをこの動物園で見ることができる。

動物園の人たちに案内されて見にいったところ，セイウチは呼びもしないのにプールでの泳ぎをやめてわれわれのところに近づいてきて，ワイヤブラシのようなひげづらを鉄柵(てっさく)にこすりつけた。

成獣では体重が3トンにも達するというセイウチではあるが，ここの個体はまだ1トンにすぎない。セイウチ特有の長い2本のきばはまだはえておらず，それほどの重量感はうけなかったが，鉄柵に沿ってつくられた給餌(きゅうじ)や掃除(そうじ)のときの隔離用の檻に自分ではいり，大きな鉄の扉(とびら)を荒々しく開(あ)け閉(し)めする動作は精悍(せいかん)そのものであった。

この動作から，動物園に収容されているとはいえ，アシカとかゾウアザラシなどにはみられない野性みがあり，きびしい環境の海でホッキョクグマとときに戦うという性質の激しさをうかがい知ることができた。

《レニングラード動物園》

モスクワ動物園より1年あとにできたとはいえ，106年の歴史を誇るレニングラード動物園は，園長の説明以上に内容は充実しており，新しい動物舎の建築工事も進められていた。この動物園ではヘラジカ（エルク）やシフゾウなど，シカの種類を集めることにとくに力を入れていた。

シカの種類のなかで最大のヘラジカも，ソ連を代表する動物の1つであり，レニングラードの郊外での狩猟の対象となっているほどにふえているという。

特別の珍獣のいないレニングラード動物園ではあったが，ここで案内してくれた副園長から，オオアリクイの食性について，常識とは違った珍しいことを耳にした。

長い鼻と長い大きな尾をもつオオアリクイは，日本のみならずどこの国でも，もっぱらアリやシロアリあるいは甲虫類の幼虫だけを食べていると信じこまれ，動物園ではアリの代用食として蜂蜜(はちみつ)，牛乳，鶏卵(けいらん)なども与えているのであるが，ここではこれらのほかにハツカネズミを食べさせているという。そして，ハツカネズミを与えるようになってからオオアリクイが出産し，生まれた子も元気で育っているから，きっとハツカネズミを食べさせたことがよかったのであろう，とのことであった。

オオアリクイがハツカネズミを食べることについては，今までだれも報告しておらず，食べるとしても生まれたばかりの子ネズミであろうとの問いに対して，いやじゅうぶんに成長した個体で，この方法は自分が苦労して成功させたのだ，という答えに，ぜひ見せてもらうことにした。

寒冷地の動物園らしく，キリンからペリカン，ニシキヘビにいたるいろいろの動物を一堂に収容してある暖房のよくきいた大きな越冬用動物舎の一隅(いちぐう)に，オオアリクイも飼われていた。

飼育担当の女性がハツカネズミを運んでくると，オオアリクイはその姿を見つけ近寄ってきた。彼女は手なれたようすでいとも無造作にハツカネズミの尾をもってコンクリートの床にたたきつけてから，それを手のひらの上にのせ，まだピクピクさせている鼻先をオオアリクイの目の前に差しだした。すると長い舌を出すこともなく，一瞬のうちにハツカネズミを吸いこんでしまった。

①湿地や草原にすみ，②人間よりもはるかに鋭い嗅覚(きゅうかく)をもった，③長い鼻を穴の中に突っこんでえさを捜す。④鋭いつめで他の動物を傷つける。⑤動物性のえさを食べ，⑥体長が1メートルを越える。という事実をならべれば，ハツカネズミぐらいは食べるにきまっているという意見が出そうだが，このことに気づいて試みた副園長を改めて見直した。もっともハツカネズミを身動きのできないような状態にして，しかも手のひらの上にのせてやらなければ食べないということは，自然環境下でもそれを食べるのは，特殊な場合に限られているのかもしれない。

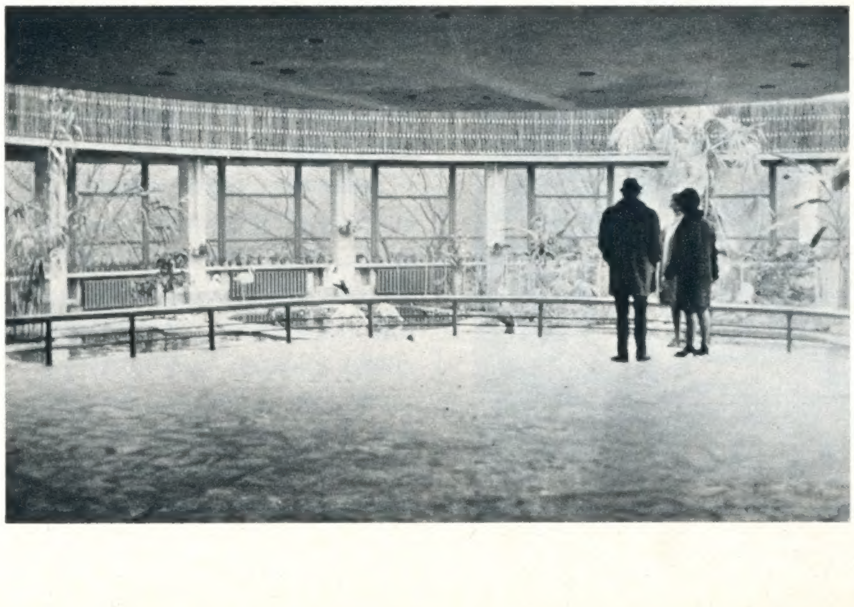
《キエフ動物園》

ウクライナ共和国に属するキエフ動物園は，キエフの町全体が森と花につつまれているという土地柄もあってか，前二者にくらべると，広々とした林のなかに池あり丘ありといった動物園で，花壇もあちこちに見られた。

この動物園の自慢は鳥類関係であるとは聞いていたが，訪れてみるとほかの動物たちにくらべてりっぱな施設が目だち，鳥類に対する意気ごみがなるほどと感じられた。

とくに零下30度を越えるという冬のきびしい寒さから鳥たちを守るために，本格的な集中暖房方式を取り入れ，鳥舎だけでなく屋外の池にまで，結氷しないように加温装置がほどこされていたのはさすがであった。モスクワやレニングラードの動物園の施設からは想像もできないようなモダンなドーム型のガラス張り大鳥舎にはいってみると，花や芝生(しばふ)が植えられ，案内してくれた副園長（女性）ご自慢のフラミンゴやいろいろの鳥が放し飼いにされていた。この鳥舎に連なっているその他の鳥舎もよく暖房がいきとどき，それぞれの鳥の生態がわかるようにくふうされていた。

モスクワ動物園がスケート客でにぎわうのに対して，このキエフ動物園は5月の花盛りの季節に，花と動物を楽しみに多くの人びとが訪れるということであった。■　（江ノ島水族館飼育部次長）





キエフ動物園
ドーム型大鳥舎の内部（左）
と雨にぬれる正門



ヤギ（飼育種） *Capra hircus*

現在飼育されているヤギは，先史時代に家畜化されたヤギの子孫だと考えられている。家畜としては，イヌに次いで古いものであろう。野生原種は，現在なお西アジアからクレタ島にいたる地域の山岳地帯に生息する，パザン（ベゾアーヤギ）だといわれる。

現在の飼育数では，ヒツジはヤギにまさっているが，新石器時代にはヒツジよりもヤギのほうが，ずっと広く飼育されていた。当時スイスで飼われていたヤギには，すでに現在アルプス地方で飼われている品種のもつ特徴が，ことごとくあらわれていた。

また古代エジプトの記念建造物には，長い碑文をそえたヤギの絵が描かれている。これによると，すでに遠いむかしから，ヤギはナイル渓谷の住民によって飼われ，その数も非常に多かったことがわかる。墓碑などに見られるフレスコ画には，古代エジプトの農民の生活を描いたものが多いが，そこには必ずヤギが登場している。

ヤギは品種，地域によって，体形にかなりの差がある。ほっそりした，四肢(しし)の長いヤギがいるかと思えば，ずんぐりして四肢の短いヤギがいる。からだの大きさからみても，肩までの高さ40～85センチ，体重30～90キロと，かなりの幅がある。側面から見た背の線は，ヒツジのようにまん中が高くなっていることもあり，水平のこともあり，低くなっていることもある。

耳は，大きくてたれ下がっていたり，小さくて立っていたり，横にぴんと張りだしていたりする。つのは雌雄にかかわらず，はえたりはえなかったりする。つのの断面は三角形で，表面には条線がついているが，形や大きさ，はえる方向は，実にさまざまである。

このように体形はさまざまだが，共通の特徴としては，尾下腺（びかせん）と肉髯（にくぜん）がある。尾下腺は，尾の下にある，特有の臭気を発する発香腺（はっこうせん）である。肉髯は，あごの下にある皮膚の突起で，２つあり，毛でおおわれている。

体毛は，白いもの，黒いもの，灰色のもの，淡黄色のものと，実にさまざまで，斑点のついたものもある。毛並みはあらくて厚く，比較的短くて，その下にまばらな，細い羊毛状の綿毛を隠している。ただアジア産のいくつかの品種だけは，毛並みが長く絹状で，下毛も豊かであり，その毛が利用される。

ヤギの品種の分類には，その利用目的によって，乳用，毛用，肉用と分けることもあるが，兼用種も多い。本誌では，生産地によって，ヨーロッパ種，アジア種，アフリカ種の３つに分けて説明し，また特徴的な品種であるアンゴラとカシミールについて述べよう。

主要な品種

ヨーロッパ産のヤギとして有名なものに，アルパイン種がある。これはおもにスイス，フランス，イタリア，ドイツで飼われているが，良質の乳を出すので高く評価されている。ザーネン種のヤギは，スイスのザーネン谷が原産地だが，スイスのほかドイツでも多く飼われ，乳は乳製品の原料とされる。

飼育種のヤギも野生のヤギに劣らず
高いところに登るのが大好きである。
人間のとても近寄れないような岩山に登り
得意そうに下を見おろしている。
PH. E. TONDEUR ATLAS PHOTO



ヤギ。ウシ科ヤギ属。
いわゆるヤギひげは，若いときから雌雄に
かかわらずはえていて，あごの下の肉髯とともに
ヤギの大きな特徴となっている。

PH. C. NARDIN-JACANA

アフリカ産の品種で代表的なものは，ヌビアン種である。これはエジプト，スーダン，エチオピアの原産で，乳用種とされる。その他セネガルのコビトヤギ，ナイジェリア，リビア，チャドに飼われるマラディの赤ヤギなどがある。荒地にすみ，えさにも恵まれないのに，非常に多量の乳を出す。

アジア産の品種としては，まず独特の毛並みをもつアンゴラ種があげられる。体毛は明るい白色で，いわゆるモヘアはこのヤギの毛を製したものである。次にカシミール種だが，体毛はきわめて細い，絹状の毛で，これを原料にした毛糸や織物は，たいへん高価なものである。

アンゴラ種

アンゴラヤギは，おそらく飼育種のヤギのなかで，いちばん美しいものであろう。大きくてがんじょうなからだつき，長い脚(あし)，独特のカーブを描くつの，長く美しい毛並みをもった，すばらしい動物である。

雄のつのは稜線が鋭く，先に向かってしだいに薄くなるが，先端はそれほどとがってはいない。一般に雄のつのは，二重のらせん形を描いてのびている。これに反して雌のつのはもっと小さく，細くて，断面は丸みを帯び，耳の近くで曲がっている。

鼻づらと耳は，短いつやのある毛でおおわれている。他の部分では，毛が非常に長く，柔らかで，ちぢれており，いくらか粗毛が混じっているが，おもに綿毛からなっている。雄も雌も，いわゆるヤギひげをはやしているが，これはかなり長くて，他の部分の毛よりもかたい。一般に毛色はつやのある白色で，むらがない。しかしときには，明るい色の地に暗い斑点があらわれているものもある。1頭のアンゴラヤギから，年に1250～2500グラムの毛がとれる。

古くは原産地以外では，ほとんど知られていなかった。フランスのブロン〔1517—1564〕というナチュラリストは，「ヒツジのように毛のちぢれたヤギ」について，最初に述べたヨーロッパ人だが，かれは「このヤギは，絹のように上質の，雪のように白い毛並みをしていて，呉絽と呼ばれる織物の原料になる」と書いている。

アンゴラヤギの名は，原産地である小アジアの町の名からきている。アンゴラの町は，ギリシャ・ローマ時代から重要な商業の中心地であり，今ではトルコの首都となり，アンカラと呼ばれている。

このヤギは，夏は暑く，冬は非常に寒い，乾燥した地方にすんでいる。山地にまったく





食べ物がなくなる季節には，そまつな家畜小屋に逃げこむが，それ以外の時期には放し飼いになっている。とても神経質な動物だが，きびしい自然環境のなかで，大きな気温の変化によく耐える。とはいうものの，快適に暮らせるためには，かわいた土地が必要である。

夏には，番人が月に数回ヤギの毛を洗ったり梳いたりして，毛並みの美しさが失われないようにつとめている。毛を刈るのは4月で，「モヘア」の名で知られているこのヤギの毛は，直ちに荷づくりされ，送りだされていく。

アンゴラヤギをヨーロッパの風土に馴化させようという試みは，何度も行なわれた。この試みは成功したが，採算のうえから，ヨーロッパでの飼育はすたれてしまった。

カシミール種

カシミールヤギは，アンゴラヤギと同じように高く評価されている。どちらかといえば小がらであるが，よく均整のとれたからだをしている。体長150センチ，肩までの高さ60センチほどである。胴体は，がんじょうな四肢（しし）にささえられてすらりとのびているが，背は丸くなっている。尻の高さは，肩までの高さとあまり違わない。

首は短く，頭は大きいほうで，目は小さい。

ヒマラヤタール *Hemitragus jemlahicus*。ウシ科タール属。かつて飼育種のヤギの原種の1つと考えられていた。首の左右の毛がのびてたてがみ状になり，ヤギひげはない。(上)
PH. HOLMES-LEBEL

ヤギは食いしん坊で，木の葉や草をむさぼり食うが，粗食にも耐え，どんな荒地でもうまくえさを見つけだすことができる。(下)
PH. G. HOUEL-ATLAS PHOTO





耳はたれ下がっていて，頭の半分ほどの長さがある。つのはないことが多いが，つのがある場合には，前方に鋭い稜線をみせ，先端は後ろを向いている。

鼻づらと目のふちは，短い毛でおおわれているが，その他の部分では，毛並みは豊かで，毛質は細く，光沢がある。この下には，細くて短い綿毛がはえているが，この毛はきわめて柔らかく，ふわふわしている。毛色は個体差が大きく，白色から暗褐色までさまざまであり，ときには黒いものさえある。

この美しいヤギの生息地は，チベットからソ連のキルギス共和国，ウズベク共和国に及んでいる。ベンガル地方にもいるが，これは移入されたものである。チベットでは山地に広く分布し，極度に寒くてきびしい冬の間も，山で過ごしている。

かつてヨーロッパでは，このヤギの毛から織ったもの，とくにカシミヤのショールはよく知られていたが，それが何の毛からつくられるものかは，知られていなかった。1664年にムガール帝国皇帝の供をしてチベットを訪れたフランス人医師が，カシミールヤギを見た最初のヨーロッパ人である。今日では，このヤギ1頭から，年に100〜200グラムの毛がとられる。

カシミールヤギから得られる利益に目をつけたヨーロッパ人は，この動物を自分たちの国に移入しようという気になった。それを最初に試みたのは，フランスのテルノー男爵で，かれは同時にカシミヤのショールを織る技術も導入した。かれがこのヤギを手に入れたいと考えていたとき，フランスの東洋学者，ジョベールが協力を申しでた。1818年，ジョベールはみずから輸送の任に当たり，1300頭のヤギを連れてクリミア半島に出，海路フランスのマルセイユに達したのは，1819年4月のことであった。

苦しい長旅に耐え，生き残ったヤギはわずかに400頭だったが，それも極度に消耗しているように見えた。船旅がいちばんこたえたのが，種ヤギたちであったので，もう繁殖できないのではないかと心配された。

幸いちょうど同じころ，フランスの動物学者，ディヤールとデュボーセルの2人が，雄のカシミールヤギを，パリの動物園に送ってきた。大きくてたくましい，年とったヤギで，インド人から贈られたものであった。この雄ヤギと，ジョベールの連れてきたヤギたちとのあいだに交配が行なわれ，フランスでの繁殖に成功した。

のちにこの品種は，オーストラリアとドイツにも移入されたが，ここでは繁殖に成功しなかった。

飼育ヤギの野生化

遠いむかしから，ヤギがたいへん役にたつ家畜であることは，広く認められていた。だからこそヤギは，世界じゅうに普及したのである。ヤギはきわめて多様な条件の下で生活できるし，群れをつくって行動するので，多数を飼育するのに適している。夜は小屋や柵の中に入れて，敵に襲われたり逃げたりしないように見張らなければならないとしても，昼は放し飼いにできる。このように粗放な飼育をしていたことから，野生に帰るヤギが出

ヤギの雄たちは，交尾期には雌を得るために
激しく戦う。これはなかなかの見ものだが
負けたほうが重傷を負うようなことはない。
PH. TREMELLAT–IMAGES ET TEXTES

ヤギが家畜となったのは非常に古く，新石器時代に
すでにスイスでは，人間に飼われていたという。
その後，世界各地に持ちこまれ
それぞれの風土によく適応した。（右上）
PH. Z. F. A.



できた。

アジア南部の山岳地帯や、地中海の小島などでは、野生に帰った飼育種のヤギがいる。たとえば、イタリアのサルジニア島に近いタボァラ島のヤギは、毛色がさまざまで、白、黒、ぶち、赤褐色のものがいる。これらのヤギは、大自然のふところで、まったく自由に生活している。しかしつのの大きさを見ると、これがほんとうの野生種ではなくて、以前、人間に飼育されていたヤギが野生化したものだということがわかる。

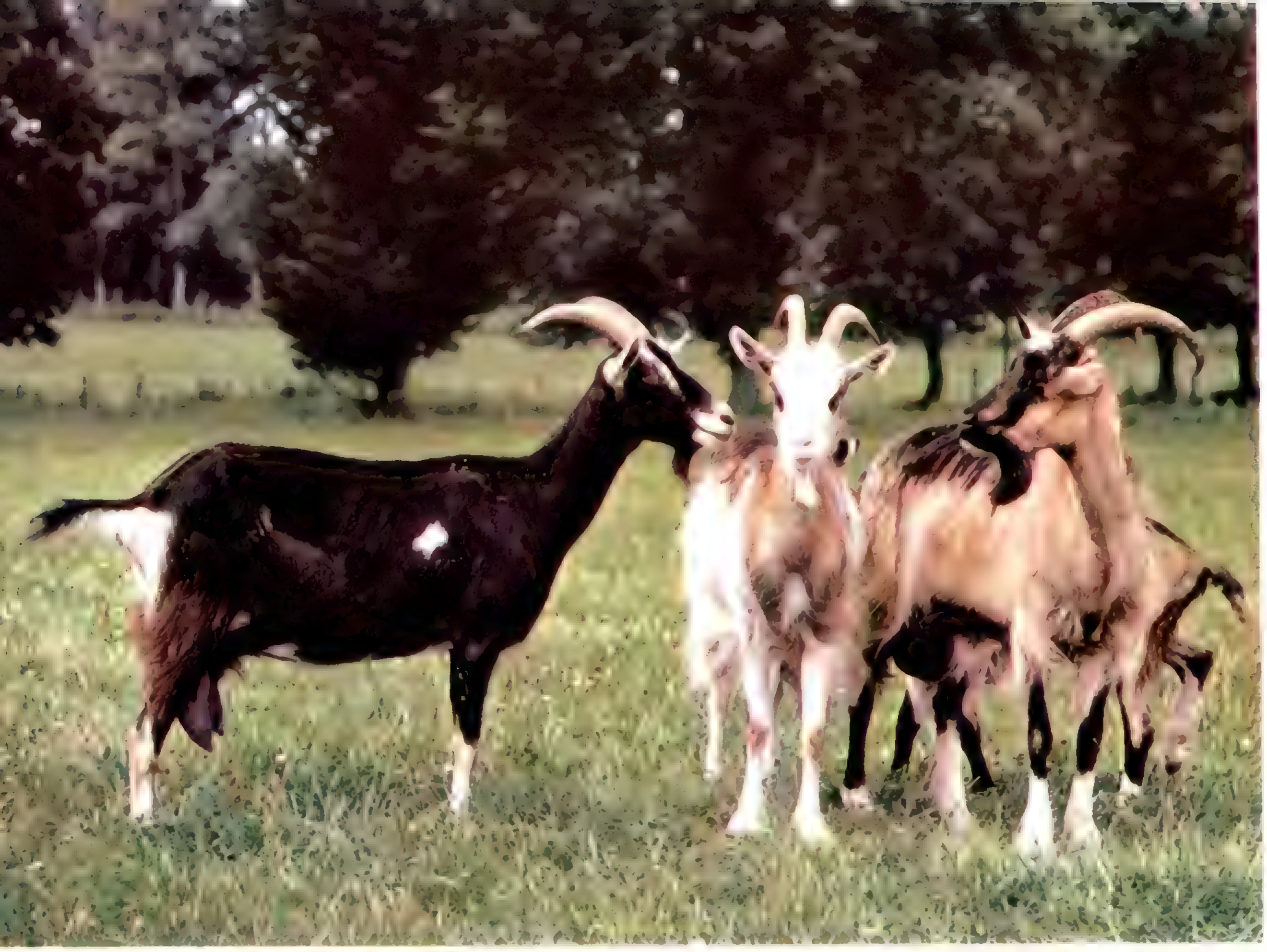
ダニエル・デフォーの小説『ロビンソン・クルーソー』の舞台は、太平洋の無人島であるフェルナンデス島といわれる。ここでクルーソーが発見したことになっているヤギたちは、16世紀のスペインの航海家フェルナンデスが持ちこんだヤギが野生化した、その子孫であった。

フェルナンデス島は山が多くて、ヤギたちにとってはうってつけの環境であったから、ほどなくヤギは異常なほどの繁殖ぶりをみせた。ところがスペイン人の敵がときどき島に



ヤギの日本での飼育数は、1970年現在約17万頭で、もっとも多かった時期にくらべて4分の1以下にまで減っている。ほとんどが乳用の、サーネン種である。（下）

PH. F. BRICOUX JACANA





上陸して、船員の食糧にヤギを利用するので、スペイン人たちは島のヤギを、根絶やしにすることに決めた。たくさんのイヌが放たれ、たちまちヤギはあらかた殺されてしまった。

イギリスの提督アンソン卿が1741年に、壊血病に苦しむ部下たちとともに、フェルナンデス島で3か月を過ごしたとき、島には200頭ほどのヤギが、20〜30頭ずつ群れをつくってすんでいた。アンソン卿は、これもまた野生化したイヌたちが、どのようにヤギを襲い、ヤギたちがどのように身を守ったかについて、記録を残している。

ある日かれは、イヌたちが一団となって、山の斜面を突進していくのを見た。山の頂上に目をやると、ヤギの群れが見えた。イヌたちを見つけると、ヤギたちは直ちに避難したが、そこは岩だらけの、崖の上の狭い道を通らなければ近づけないような場所だった。群れのリーダーである年とった雄ヤギは、勇敢にも踏みとどまって、襲ってくる敵を待ちうけた。イヌたちは、あと20歩から30歩の距離まで近づいたものの、道のけわしさに恐れをなし、攻撃をあきらめたという。

この島のヤギたちは、ひどく注意深くなり、人間を恐れるようになっていた。アンソン卿の部下たちは、1日に1頭のヤギを捕えるのがやっとだったという。

さらにのちになって、あるナチュラリストがフェルナンデス島を訪れたとき、イヌたちはもういなかった。ヤギのほうは、アンソン卿が上陸したときよりも、数がふえていた。しかし疑い深いことはあいかわらずで、人間を見ると断崖の上から降りてこなかった。

登ることが最大の楽しみ

ヤギの性格は、多くの点でヒツジに似ているけれども、違っている点も少なくない。ヤギは陽気な、気まぐれな動物で、いつも遊びたくてむずむずしている。

ヤギの子は、生まれて2週間もすると、とんだりはねたりするだけでは満足できなくなり、遠征に出かける。いつも高いところに登りたがるのは、この動物の本能で、積みあげられた材木や石の上によじ登ったり、岩山や階段でさえも。とにかく登ることが最大の楽しみなのである。ときには高いところに上がったまま、降りられなくなってしまうこともあるが、決して目をまわすことはなく、いっこうに平気なようすで、絶壁のふちから谷底をのぞきこんだりしている。

雄どうしが交尾期にけんかをするのは他の動物と同じだが、ときには雌どうしでも激しいけんかをする。相手をつのにかけて、遠くへ投げとばすことさえあり、格闘はたっぷり15分間も続く。しかしけがをすることは珍しく、たいていはわずかに赤くなった目に、戦いのあとがうかがえるだけである。

ヤギにはまた、突然はねあがって駆けだすくせがある。もっとも勇敢なヤギでさえ、なんでもない物音にぎょっとして逃げだすと、止めることは困難である。

雄ヤギの姿は、いつも堂々としていて、いかめしい。一般に雄は雌よりも大胆で勇敢である。ヒツジは若いときだけ元気だが、ヤギは年をとっても生命力が盛んである。

ヤギは古くから人間に飼われているので、人間に対する情愛は深い。山地などで、見も知らぬハイカーのあとに、何時間もついて歩くことがある。それでいて、何かおいしいものをねだろうというつもりは、ちっともないのである。だれかが砂糖のひとかけらでもくれてやろうものなら、その人をおぼえていて、あとでまた会うと大歓迎する。

飼い主に愛されていると感じると、たちまち独占欲が強まり、多少でも自分と同じように飼い主から目をかけられている仲間がいると、それをつので突きはじめる。利口な動物な

日本の在来ヤギは、[illegible]
持ちこんだものが始まりといわれる。1878年には
[illegible]
以後、何度か輸入されて[illegible]
[illegible]



ので、不正に対しては敏感である。また罰を受けるのが当然だというような場合も、ちゃんと心得ている。

放牧から半放牧へ

ヤギは知能が高いので、スペインでは、ヒツジの群れのリーダーに使われる。この国では夏の数か月間、ヒツジを標高2000～3000メートルの山地に連れていき、そこに放牧している。ここではヒツジ飼いたちにとって、ヤギはなくてはならない助手である。もっとも、ヤギに連れられたヒツジたちが、危険な山道を上へ上へと登り、降りられなくなることもときに起こるのだが。

ギリシャでは、ヤギが家畜のうちでもっとも多くを占めている。ヤギはこの国の山という山に数多くすみ、特有な臭気のため、観光旅行者にも遠くからヤギの居場所がわかる。ほとんど放牧の状態におかれているのは、アルプス地方と同じである。

番人たちはヤギの群れを、山深い牧場に連れていき、夏の間はそこに残しておく。秋になると、集めて村に連れ帰るのである。何頭かが行方不明になることも、ときどき起こる。山の牧場に放牧されているときでも、ヤギたちは一定の周期で番人が塩を持ってきてくれるのを、きめられた場所で待つ。

中央アフリカでも、ヤギの放牧が行なわれている。日が暮れると、ヤギたちはセリバに帰ってくる。セリバというのは、肉食獣に襲われないように、イバラの生垣をめぐらしたところである。この地方では、人里離れた場所で、ヤギの大群を見かけることがある。草を食べているものもあるが、木に登って葉を食べているものもある。

コビトヤギと呼ばれる品種は、とくに木登りがうまい。太いアカシアの木などのてっぺんまで登り、枝の上で愉快そうにからだをゆすっている。ふつう、1本の木の上に5～10

ヤギの毛色は、野生原種とされているパサンの褐色をそなえていることもあるが、品種や地域によって実にさまざまである。
PH. BILLE





頭のヤギが登っている

モロッコの南部には、アルガニエと呼ばれる、葉のよく茂った木がある。この木にヤギたちはいとも簡単に登り、いちばん高い枝の上ではしゃいでいる。アルガニエの実は果肉が多くて種がかたく，その種のなかの仁から，現地の人びとは食用油をとる。この種を集めるのに、人びとはヤギの助けをかりる。つまり、ヤギたちがアルガニエの実をむさぼり，種を吐きだすと、それをたんねんに拾い集めるというわけである

アメリカ大陸のヤギは、すべてヨーロッパ人が移入したものである。しかし今では、大陸全体に普及している。オーストラリアでも，ヤギは人間によって持ちこまれ、非常な勢いでひろがった

南ヨーロッパでは，荒地の開発が進むにつれて、ヤギの飼育に適した土地がますます少なくなる傾向がある。ヤギのいちばん好きな草は，かわいた気候の，肥沃な，日あたりのいい高地にはえる草である。肥料をほどこしたり，腐植土を含んだ草原は，ヤギの牧場には向かない。ヤギは，かつて畑であったところでは，長い間肥料を入れていないところの草でさえ，食べようとはしない。

放牧になれたヤギたちには，水場をつくってやるだけでよいが，小屋で飼われているヤギたちは，水とライムギのふすまと塩とを混ぜ，あたためた飲み物を，きまった時間に与えられる。今日では，放牧よりも半放牧が好まれる。これは牧場の近くにそまつな小屋をつくり，天候の悪いときなどは，妊娠（にんしん）中のヤギや子ヤギをそこに避難させるのである

ヤギは驚くほど粗食に耐える動物で，やせた牧場や小石だらけの場所でも，ちゃんと食

ヤギの母と子．１回の出産で１～４頭の子が生まれる　子は生まれた日のうちに母親のあとについて歩けるようになり滋養のある乳を飲んですくすくと育つ。（上，下）

PH. BUZZINI

PH. Y. LANCEAU JACANA

木に登るヤギ。モロッコ南部の山地では，ヤギがアルガニエと呼ばれる木に登って実を食べる。現地の人びとはヤギが吐きだした種を集め油をしぼって食用にする。（右）

PH. Y. LANCEAU JACANA

ヤギは粗食に甘んじ，寒さにもよく耐えるので北ヨーロッパの山地に住む人びとにとってヤギの乳と肉は重要な食糧となる。ノルウェーのテレマーク山塊のふもとにて。（**46**—10，11）

PH. CANDELIER











べ物を見つける。しかし食いしん坊であることには変わりはなく，木の葉や若芽を手当たりしだいにむさぼり食う。そこで，森林を食い荒らすと非難されることがある。

確かに，森林が荒らされることの影響については，見過ごすわけにはいかないだろう。まばらにしか木がはえていない森林でも，地面からの水分の蒸発を適度に調節し，湿度に確実な影響を与えている。また森林を伐採すると，そこでは水による浸食が進んだり，落葉がないため腐植土が欠乏したりして，土地が荒れていく。

しかし森林が減ってしまうことについて，ほんとうに責任があるのは，ヤギではなくて人間である。人間は幾世代にもわたって自然を破壊し，かけがえのない財産をむだにしてきた。一度伐採された森林がもとにもどるには，きわめて長い時間がかかるのだが。

年に1000リットルの乳を出す

ヤギは毛を刈って利用するために飼われるほか，乳をしぼるために飼われることが多く，また肉も広く利用される。

乳の量は，ヤギが比較的小がらであることや，えさのえり好みが激しくないことを考えると，非常に豊富だといってよい。実際この動物は，1年に体重の12倍もの乳を出す。これがウシだと，8倍以下なのである。またヤギの乳はウシの乳にくらべると，たんぱく質や脂肪やミネラルを，ずっと多く含んでいる。乳がよく出ることから，ヤギは《貧者のウシ》という異名も与えられている。

品種によって違うが，1頭の雌ヤギから年に350～1000リットルもの乳が得られる。代表的な乳用種のザーネン種では，年に270～350日間乳を出し，総乳量は500～1000リット



ジャコウウシ。ウシ科ジャコウウシ属。
マンモスやケブカサイの時代から，アメリカにすんでいた古つわもの。かぶとのようなりっぱなつのがいかにも精悍そうだが，
実際にはかなり気の弱い動物である。（左）
PH. P. A. MILWAUKEE-JACANA

ヤギの食物は草だけでなく，木の葉や芽も大好物である。野生化したヤギが畑や森林を食い荒らす害獣となった例が，小笠原諸島や地中海の島々などで，いくつか知られている。（上）
PH. CANDELIER

ヤギ。体形と毛色は，地域や品種によってさまざまで，つのの形にもいろいろある。このようにりっぱなつのをもつこともあれば，まったくはえないこともある。（下）
PH. A. VISAGE-JACANA



ルになるが、1500リットルを越えるものも珍しくないという。脂肪率は3、4パーセントに達する。このようなヤギの乳は、人間の飲料となるほか、チーズの原料としても使われている。

食用肉としては、おもに子ヤギのものが使われる。というのは、成獣のヤギの肉は筋が多く、去勢しない雄の肉には、特有の強い臭気があるからである。

そのほか子ヤギの皮はキッドと呼ばれ、なめされて広く利用されており、その取引きもたいへん盛んである。

子を生ませるのにいちばんよい年齢は、雄では20か月、雌では18か月くらいである。種ヤギは、年に100～120頭の雌と交尾できる。妊娠（にんしん）期間は150日で、1度に1～4頭の子が生まれる。生まれたばかりのヤギの子は、体重が4キロほどで、20日間で2倍にふえる。哺乳期間は約100日で、2年半で成獣になる。平均寿命は15年ほどである。

ヤギは家畜としてすぐれた点をたくさんもっており、荒れた土地でも飼うことができるが、ヤギの飼育はしだいにすたれている。かつてはヒツジよりもヤギのほうがたくさん飼われていたのだが、今では逆転してしまった。これはヒツジのほうがヤギよりも畜産学的に改良が進んでおり、商工業ベースにのって大量生産工程にのることに成功し、経済的にも将来性が大きいためであろう。



ヤギ（カシミール種）
ヒマラヤ地方で飼われている毛用の品種で
豊かで美しい体毛からは
有名なカシミヤのショールが織られる。
PH. B. LOSIER

ヤギ（ロビンソン・クルーソーの島
フェルナンデス島で野生に帰った群れで
すでにかつての主人である人間を忘れ
きわめて用心深くなっている。（右上、中下
PH. J.-P. VARIN JACANA





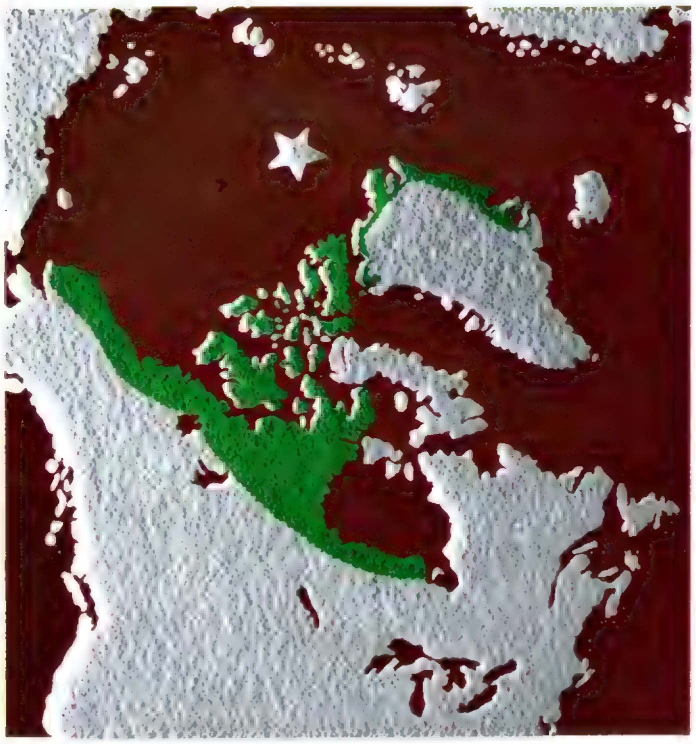


[illegible]種
[illegible]と見まがうような，やや[illegible]のかか[illegible]
美しい体毛をも[illegible]ている[illegible]の毛を刈ったものが
いわゆる[illegible]である[illegible]

46　15

PH. M. [illegible]





ジャコウウシ属　*Ovibos*

ジャコウウシ　*Ovibos maschatus*

ジャコウウシは、トナカイとともに、極北の地に見られる反芻（はんすう）類である。現在の分布はアラスカ、カナダ北部とグリーンランドに限られているが、第四紀初期（約150万年前）には、北アメリカとユーラシアの北部一帯にたくさん見られた。マンモスやケブカサイなどとともに発見されるジャコウウシの化石が、それを語っている。

ジャコウウシの名は、その肉のもつ強い麝香臭と、ウシに似た外観によるが、実際にはウシよりもヤギ亜科のカモシカ類に近い。鼻が毛におおわれて裸出部がごく小さく、尾が短くて、乳頭がふつう２対ある点などで、ウシとは異なる。

体長は2.0～2.6メートル、体重は300～410キロだが、まれに650キロにもなる例がある。からだはがんじょうで、四肢（しし）は太く短く、肩にはわずかな隆起がある。首は短くて太く、頭はやや幅狭くて長く、重々しい

体毛は胴体ではきわめて長く、ところにより60センチに及ぶ。尾は長い体毛に隠れてふつう見えない。ジャコウウシは、極地にすむが白色をしていない。毛は暗褐色でちぢれているが、下毛は薄いベージュ色で長さは５～７センチあり、柔らかくて密生している。首とからだの側面は黒っぽく、背の中央部は黄白色から褐色になる。

これらの毛は、ジャコウウシを極北の寒気から守り、風雪に耐えやすくしている。雪の上にすわるとき、からだの下部の長い毛は座蒲団の役割を果たす。また雌は子をその下に包みこむようにして守る。このような長い毛のおかげで、ジャコウウシはトナカイよりも寒さに強いという。さらに体毛に隠れる小さな耳、短い四肢は、体表面積を少なくして体熱の消耗を防ぎ、幅広いひづめと側蹄は雪の

ジャコウウシ。ウシ科ジャコウウシ属。
どっしりとしたからだつきは鈍重のようだが
ほんとうは敏捷な動物で、走るのも速いし
岩山を駆けまわることもできる。（上）
PH. OKAPIA

ジャコウウシの分布。
トナカイとならんで北極地方にすむ反芻動物で
アラスカ、カナダ北部、グリーンランドと
その周辺の島にいる。（下）



なかにからだがめりこむのを防ぐとともに、雪をかいて草を捜すのに適している。

顔にはときに白斑がある。額の部分はほとんどつのでおおわれている。つのの根もとは広くて平たく、2本のつのは近接して、境はほとんどみぞのようになっている。つのははじめ下方に、次いで上方に曲がり、いくつかの小突起や隆起がある。ひづめは大きく、とくに前肢（ぜんし）では大きくて丸い。

16世紀のスペインの旅行家、ロペス・デ・ゴマーラは、コルテス〔メキシコのアズテック帝国を滅ぼした征服者〕の秘書であったが、キビラ王国で「ウマのように大きく、大きなつのをはやし、尾が短くて、長い毛に包まれたヤギをたくさん見た」と書いている。また、フランスの探検家で毛皮収集家のジェレミは、1720年にハドソン湾付近で出会った動物を、ジャコウウシと名づけている。このことから見て、かつてはアメリカ大陸に広く分布していたらしい。

ジャコウウシは泥水浴びを好むが、これは春先の毛がはえかわる時期には、昆虫にたかられるのを防ぐのに有効な方法となる。塗りつけた泥が皮膚を守るわけだ。
PH. P.-A. MILWAUKEE JACANA

19世紀までは、ジャコウウシの群れには、100頭を越すものがあったというが、現在では最大65頭、ふつう10～25頭ほどで群れをつくっている。群れはおもに雌と子とからなり、雄は交尾期には雌の群れを従えるが、それ以外は1頭か、雄だけの数頭の群れで暮らす。

人間が銃を持って狩りたてるようになる以前には、ジャコウウシは円陣をつくり、子をなかに入れて、敵を撃退することができた。これはオオカミなどには有効な方法だったが、



人間に対しては役にたたず、かえって群れが全滅する事態を引き起こすことになった。

交尾期には雄どうしが激しく戦うが、重傷を負うことは少ない。交尾期の雄はとくに強い麝香臭を放ち、また嫉妬深くなり、雌に近づく鳥さえも追いはらう。はじめて性的成熟に達した雄や老いた雄は、繁殖群を追われて、別に雄どうしの群れをつくっている。

ジャコウウシは粗食であり、果てしない雪原のわずかな食物を求めて、ゆっくりと歩きまわる。北限にすむものは、夏は川の近くで過ごし、秋には大群をなして南へと、島から島へ厚い氷の上を渡っていく。しかし他の地方では、大きな移動はしない。

春から夏にかけては、食物になる植物は多いときだが、毛がはえかわる時期で薄くなっているので、昆虫（こんちゅう）類に悩まされる。泥水を浴び、泥の皮でからだを包んで虫を防ぎ、毛がはえかわるまでおとなしくしているという。

交尾期はふつう8月だが、その後8、9か月の妊娠（にんしん）期間を経て、初夏にふつう1子、ときに2子を生む。ふつう出産は2年に1回である。生まれたばかりの子は肩までの高さ45センチほど、体重は5～10キロほどである。生まれて1、2時間たつと、もう母親について歩ける。母親はやさしく子を見守り、敵に対しては勇敢に戦って子を守る。

子はすぐに草を少し食べたりするが、授乳は1年半に及び、3～6歳で性的成熟に達する。ふつう雌は5歳で初産する。寿命は20年から25年である。

見かけは重そうだが身軽な動物で、ヤギのように軽々と岩山や崖を登る。山地ではまとまって行動するが、これは群れで生活する動物には多く見られる習性である。上にいるものが石を落として、下のものに被害を与えぬようにしているのだという。

ジャコウウシはエスキモーやインディアンの食用になり、皮も利用されるので、むかしはたくさん狩りとられた。しかも簡単に殺されてしまうことが多く、人間を見ても逃げようとせず立ちどまってながめていたり、ときにはとびはねながら迎えにくることさえあるといわれる。

ジャコウウシ。鉄砲を持った人間に追われてたくさんの仲間が虐殺されたが、いまだに人間が敵であるとは思っていないようだ。近づいても恐れず、自分から近寄ってきたりする。

PH. MALLET-JACANA

カモシカ属　*Capricornis*

ニホンカモシカ

Capricornis crispus

ニホンカモシカは，日本の本州，四国，九州に分布する。現在では特別天然記念物とされている保護動物である。推定個体数は2000～8000頭と，かなり見積もりに幅があるが，これは目撃などに基づく地域ごとの推定数の合計なので，正確なところはわからない。最近では特定の地域で，糞の量から個体数を推算することが行なわれているが，この方法も飼育中のカモシカの糞量に基づいているので，自然状態とは異なるかもしれない。

天然記念物の指定を受けたあとも密猟が続き，戦後の一時期よりは少なくなったが，現在なおも密猟されている。これは毛皮，肉，つのが利用されるからである。

毛皮は下毛が密生していて，保温と防水性のうえでとくにすぐれているので，山での衣装として利用された。また肉は，牛馬が重要な働き手でとても食用にはできないような地域では，きわめて重要な《山の幸》であった。ニク，アオシシ，クラシシといった別名は，獣肉を意味する《しし》や《にく》に由来している。つのはカツオ釣りの擬餌として使われていた。このようにさまざまに利用されていたところを見ると，かつてはかなり大量に生息していたらしい。

現在ではカモシカは高山の動物だという印象が強いが，これは低山にいたカモシカが殺されたり追われたりして，ごく少なくなったからであろう。今でも丹沢その他の低山帯にも，カモシカは生息している。どちらかといえば高度にかかわらず，けわしい丘陵地や崖を本来のすみかとしているように思われる。現在では海抜1500～2500メートルの，亜高山帯の常緑針葉樹林に多い。

カモシカは，ウシ科のヤギ亜科に属する。反芻（はんすう）に適した胃，ひづめの形，中空のつの，といったからだの構造は，ウシ類とまったく同じである。カモシカのつのは短くて，根もとの近くに節が多く，ゆるやかに後方に曲がって，8～15センチの長さになる。雌ではやや先端のとがりが鈍く，全体としてずんぐりしている。

鼻先の鼻鏡（びきょう）は大きい。乳頭は2対あり，この点でヤギ類，ヒツジ類と異なる。体毛は羊毛のように，むく毛状である。蹄間腺（ていかんせん）と眼下腺（がんかせん）があり，この眼下腺があることは，外形のよく似たゴーラルと区別できる点の1つである。体長は100～120センチ，尾長はわずか6，7センチで，肩までの高さは70センチほどあり，雌雄はほぼ同じ大きさである。

雌雄の大きさが同じ動物では一般にそうだが，繁殖期に限れば一夫一婦制であるらしい。ときどき観察される小群は子連れのもので，成獣の雌雄は1対以上はほとんど見られない。おもに単独生活をしている。

夏には生息している地域に四通八達した一定の通路をたどって，種々の植物をあさっている。冬，雪が深いときには，多少通路からずれることもあるという。見晴らしがよく，日あたりのよい，風をさえぎる岩棚の上で，雪のなかにすわったまま4日間を過ごした例もあるという。

斜面を移動しながら植物を食べ，休息しながら反芻するのが，カモシカの毎日の生活である。行動範囲は地域によって異なるらしく，



ニホンカモシカ。ウシ科カモシカ属。
特別天然記念物の指定を受けているが
毛皮が防寒，防水にすぐれ，肉は古くは重要な
《山の幸》であったので，密猟が絶えない
北アルプス，穂高岳にて

撮影　岩合徳光



ほぼ１キロ四方とも，２キロ四方ともいわれている。交尾期に形成されるなわ張りは，これよりも明らかに狭いと思われる。

カモシカの天敵は，クマとオオカミであったが，現在では野犬が主要な敵である。襲われると，足場の悪いところに逃げこむ。敵が近づくと頭を下げ，つのを突きだして突き落とす。カモシカのひづめは，このような足場の悪いところでの行動に適した形をしている。ときには雪崩に巻きこまれて死ぬことがある。

妊娠（にんしん）期間は，飼育下で確認されたところでは約７か月で，子は４月から６月の間に生まれる。子は生まれてすぐに歩くことができ，ふつう１年間母親といっしょに暮らす。発情期は10月から１月までのようである。２，３歳で性的に成熟する。

体色は地域により変化が著しい。一般に北方の福島，宮城，岩手などでは，全体に白色で，背の正中線（せいちゅうせん）付近に褐色の毛がまじり，四肢（しし）だけ黒褐色であるなど，淡い体色である。南にいくにつれて黒みが強くなり，中部では全体に灰褐色，南部ではほとんどからだ全体が黒褐色であり，口のまわりやほおに白斑を残すだけになる。まれに全身がオレンジ色の，美しい色調のものがある。

同じカモシカ属に，台湾にすむ**タイワンカモシカ** *Capricornis swinhoei* がある。これはニホンカモシカの亜種とされることもあるほど近縁の種類だが，より小型で，体色は黒褐色であり，背の正中線に黒い線があることなどで区別できる。肩までの高さは80～90センチである。山のふもとから海抜3500メートルほどのところまで分布している。

ニホンカモシカ　「カモシカのような」という形容があるが，本物のカモシカはあしが太くて短く，動作もわりあいにのんびりしたところがある。日本の本州，四国，九州にいる。岩手にて。

撮影・[illegible]

さらに中国大陸の南西部から，マレー，ヒマラヤ，カシミール，ビルマ，スマトラにかけて，近縁の**スマトラカモシカ**（シーロー）*Capricornis sumatraensis* が分布する。ニホンカモシカより大型で，体長は130～180センチ，肩までの高さは１メートルほどである。

頭の後ろに長い毛のたてがみがあり，耳は長大で，尾も長い。体色には変化が多く，体色の違いによっていくつかの種に分けられることがあるほどである。ニホンカモシカとは，たてがみがあること，尾が長いこと，体毛があらいことなどで区別される。

これらの３種がいずれもカモシカ属に含まれることでは，学者の見解はほぼ一致しており，英名ではこの３種をシーロー（Serow）と呼び，ゴーラルやアンテロープと呼び分けている。

日本とその周辺の在来ヤギ

野澤　謙

日本内地でわれわれがふつうに見ることのできるヤギは，ザーネン種というスイス原産の，白色で大型（雌の体高70センチ以上）の乳用種である。明治末年に導入され，長野，群馬両県を中心とし，全国の山間部で自家消費用の乳をとるために飼われてきた。第二次大戦終戦前後の，食糧や飼料事情の悪かった時代には，かなり重視されたが，近年では頭数はぐっと少なくなっている。

これとは別に，九州南西部から奄美，沖縄を経て台湾，フィリピンにいたる島島および韓国南部には，古来肉用の在来ヤギが飼われ，住民の動物たんぱく源としてかなり重要な地位が与えられてきた。これの純粋のものは有色有角で，体高50センチ内外のコビトヤギと呼ばれるべきものであるが，ヤギの伝染病である腰麻痺症に対し強い抵抗力があり，繁殖の能力も高い。

沖縄を一度でもたずねたことのある人なら知っていることだが，那覇市などにはヤギ料理屋が軒を連ね，そこでヤギ肉のスープとサシミをつつきながら泡盛を味わうことができる。はじめての人にはにおいが多少鼻につくが，慣れてしまえば，なつかしい沖縄の味となる。

韓国ではヤギ肉が，妊婦の栄養剤となる。近ごろ評判を落としている総合ビタミン剤などにくらべ，効果の点で上であることは，あえて断わるまでもない。

わたしたちの研究グループは，これまでこのヤギに注目して，体尺測定，遺伝形質の記録，血液型調査などを行なってきた。離島のサンゴ礁に遊ぶヤギの群れを追って足を傷だらけにしたこともあれば，断崖絶壁をスイスイと逃げる相手を追って足を踏みはずしかけたこともある。眼下は怒濤さかまく荒海，落ちたら命はない。哺乳類のなかでも有数のアルピニストであるヤギと岩場のワザを競うなどは，身のほど知らずというべきであろう。

この在来ヤギの肉量の増大のために，内地からザーネン種が持ちこまれ，交雑による改良がはかられている。しかし，大きなザーネンヤギが腰麻痺で腰を抜かしているかたわらで，小型の在来ヤギのほうはピンピンしているという情景には実にしばしば出会ったものだ。これでは改良効果は思うようにあがらない。土地土地にそれぞれ適応した在来種というものを，もっとたいせつにすべきだろう。

日本の畜産学教科書にしても，ヤギの項でザーネン種を第一に紹介するのはまあよいとして，その後に特別な人以外はほとんど見る機会もない，トッケンブルグ，アルパイン，ヌビアンなどという品種を説明するのと少なくとも同じ程度に身を入れて，東アジアの肉用在来ヤギを紹介していただけないものかと，わたしは常々考えている。

台湾の在来ヤギ

吐噶喇，奄美，沖縄と在来家畜を調査した後，1966年夏，6人の調査隊の一員として台湾へ遠征したときのことを，わたしは忘れられない。

台湾西部の農業地帯には，黒色小型の肉用在来ヤギが飼われている。これは17世紀以来，台湾海峡の対岸にある広東福建両省から，中国人移住者によって持ちこまれたものの子孫である。この黒色ヤギは，海南島から揚子江下流地域，山東半島，韓国南部を含む中国大陸の東側一帯に広い分布をもっている。そして朝鮮海峡を越え，五島列島から九州一円に，かつては分布していたとみられるふしもある。

台湾西部の調査を終わって，わたしたち調査隊は東海岸に向かった。台湾の島には中央に4000メートル近い高山を含む台湾山脈が，屏風を立てたように南北に走っている。東西の交通路は，北の海岸沿いの道と，高雄市の南の丘陵を横断する道，それに戦後開かれた，中央山脈のほぼまん中を横断する標高2500メートルの峠越えの道（横貫公路）の，この3本しかない。わたしたちは北海岸沿いのもっとも古い道を通って東部にはいった。

宜蘭県，花蓮県，台東県と東海岸を北から南へ調査を進めたのだが，ヤギの毛色は黒色がしだいに減って，褐色で黒い背線をもつ型が多くなってくる。台東県までくると褐色型がはっきり優勢になる。その年は中央の横貫公路を通って西に帰り，その翌年の調査では南部の丘陵越えの道を通ることができたが，これらの山越えの道をとると，ヤギの毛色はある地点を境にして，ほとんど劇的に変化するのがわかる。台湾の西部では黒色，東部とくに東南部では褐色の在来ヤギが飼われているのだ。

この全体が褐色で，背線や四肢（しし）の前面が黒いという毛色パターンは，実はヤギの野生原種パザン（ベゾアーヤギ）の毛色なのであって，日本の吐噶喇群島や沖縄の在来肉用ヤギはこの毛色を有しており，さらに後の調査では，フィリピン群島の在来ヤギも東部台湾の延長線上にあって，この毛色が主体となっていることも明らかとなった。

つまり東アジアの肉用在来ヤギには，毛色によって大別される2つの系統がある。ひとつは中国大陸東部の海岸沿いに広く分布する黒色型，いまひとつは東南アジアから台湾東南部をかすめ，沖縄，奄美，吐噶喇の列島線に帯状に分布する褐色型である。この黒色と褐色は，遺伝学的には1対の対立遺伝子A～aに支配され，AA または Aa という遺伝子型では褐色，aa では黒色となるものと推定される。

さて，この褐色型の分布である。東南アジアの島々から北上して台湾東南部，沖縄，奄美と連なるこの帯状の分布は，一筋の「海上の道」を暗示するかに見える。柳田国男氏や島崎藤村氏が漂着したヤシの実の故郷に思いをはせたように，わたしはこの在来ヤギのこしかたを思うのである。

褐色ヤギの伝播

わたしは沖縄において，史書や史料からヤギに関する記載を探索してみた。笹森儀助氏の1893（明治26）年の『沖縄探験記』や，1882年の『上杉県令沖縄巡回日誌』は，各島に多数のヤギが飼われていることを示しており，とくに前者は部落別の飼養頭数まで細かに記録されている。1816年のバジル・ホール氏の『琉球航海記』も，ヤギの飼養を確認しているし，1721年の『中山伝信録』，1713年の『琉球国由来記』にも，琉球物産の1つとしてヤギがあげられている。

沖縄のヤギに関する最古の記録とみられるものは，1477年の『李朝実録・中世琉球史料』であった。これは済州島在住の朝鮮人が与那国島に漂着し，同島から西表島，波照間島，新城島，黒島，多良間島，伊良部島，宮古島，沖縄本島と南から北に順次受け渡され，それぞれ1か月ないし数か月ずつ滞在して帰国した後，各島の生活実態を政府に報告したものであって，その史料的価値は高く評価されている。

これによると，各島の飼養家畜は，ウシ，ネコ，ニワトリが全島に見られるのに反し，ウマとヤギはもっとも開発の進んだ沖縄本島に現われるだけである。とくにヤギに関しては「羔」（コヒツジの意）という文字が現われているのみであって，これがはたして真のヤギを意味しているものか否かさえ不明である。

ヤギが琉球諸島において，当時すでに長い歴史をもっていたならば，他の離島にも飼養が認められてよいのではないかと考えると，15世紀の琉球においては，仮りに飼養されていたとしても，比較的

——→*





沖縄の褐色型肉用在来ヤギ　撮影　筆者

台湾の黒色型肉用在来ヤギ
日本のザーネン種と異なり1年じゅう妊娠し子を生み育てることができる

ヒグマと2人のイノシシ 43

穴と匂いの周辺

畑　正憲

コンブ漁の合間に温泉へ行ってきた中の浜の人たちが報告してくれた。

「先生。よそのクマはちっこいぞ。イヌとネコっこほど違うので，おれんちの先生のに比べると栄養不足で死にかけたガキだぞと言ってやった……」

6月に阿寒へ行った時，それは僕も気がついていた。幼児を咬み殺した事件以来，ヒグマの子を置く店はすくなくなっているが，メインストリートにあるカンコ堂という店先に1頭つながれていた。捕獲されてからひと月半ほど経っていたのに，体重はさして変化がなく，大きさもどんべえの3分の1ほどだった。

僕は女店員に訊いた。

「何を食べさせているの」

「何って……カステラとミルクよ」

「ミルク？」

「そうよ。人の赤ちゃんが飲むミルクの中にカステラを入れてあげるのよ」

人のミルク。そう言う時，女店員の顔は誇らしげに輝いた。

僕は質問を重ねた。

「何時間置きに飲ましているの」

「そうね。適当よ。腹が空いたら何となくわかるでしょ，それから食事を作ってあげるのよ」

「元気に飲むかい」

「ええ，とっても。これっくらいの量を一息で飲んでしまうの」

質問しながら，僕は子グマが飼われている木の台を観察していた。

それは，柱を中心にした1辺が約2メートルの正方形で，子グマは柱に鎖でつながれていた。その4平方メートルの板の間が子グマの生活圏であり，観光客に接する舞台でもあった。

板の上には，バター飴，山おやじというせんべいの屑，のしイカなど客が与えた食べものがちらばっている。便の跡もある。周辺部が茶褐色の線になり，その内部には消化されなかった細かな粒があり，乾いてこびりついていた。

——まだ下痢しているな。

と，僕は判断した。トウメイ高速をうろうろしているのだ。

僕は下に落ちているバター飴を拾って噛み砕き，口移しで与えてみた。すると子グマは，鮮明な怪鳥音を発して僕の舌を吸った。どんべえで経験したものはここにもあるのだ。

「かじられるよ，お客さん」

店員が忠告した。

——大丈夫だよ。

僕は目で答え，口を急に離し，指を相手の口の中へ突っこんだ。

「ケ，ケケケ……」



どんべえは前足を人間並みに使って，グルにじゃれかかる

子グマは両方の前足で僕の手首を抱えて指を吸った。奥の奥，舌のつけ根の辺りが上下に波打っているのがよくわかる。それが，乳を吸いこむ物理的な力になっているのだろう。指を差し入れた感じでは，舌が動く位置がずっと奥にあるようだ。

——そうだったのか。

と，僕はひとりうなずいた。

——どんべえが薬を吐き出したのは，このせいだな。可動部分が奥深いのだ。たっぷり飼育経験をつんだ後で，徹底的に解剖をやらねばな。

ミルクにカステラというのは，間見谷方式である。それを切り上げる潮時の違いが，その後の体重の違いになってはいないだろうか。刻々と入る情報から判断すると，僕のどんべえは驚異的に成長が早いようだった。多分，冬眠前までには，飼育下での日本記録を体重の方で樹立するのではなかろうか。

体重が40キロに達した時，僕は東京の友人に電話して，あるスポーツ用品について調べて貰った。

「おい，あれだよ。キックボクシングなどでパンツの下につけるやつ……」

「ああ，ノーファウルカップか」

「それだ。股間を守る道具。そいつをどこで売ってるのか調べて貰えないかな」

「よしきた。……ははあ，そろそろ心配になってきたか」

「うん。今のところ大丈夫だけど，なにしろくわえやすく出来ているから，万に一つということもあるから」

くんずほぐれつする際に，皮のサポーターをつけて置くだけでもずい分違うだろうし，まして正式なノーファウルカップがあれば万全だと思った。野生の動物を飼育していて，咬まれて大怪我をしても動物をうらんではいけない。全ての責

カラーページ解説

* ————→

新来の家畜だったのではなかろうか。

当時の琉球は，東南アジア各地に向けて活発な通商航海を行なっており，またスペインやポルトガルの商船が頻々と日本近海に出現するようになる時期も近い。ヤギは古来，遠洋航海の非常用食糧として生きたまま船積みするのに好適な動物とされており，このような形で南方から持ちこまれたのが，琉球諸島の褐色型在来ヤギなのかもしれない。もしそうであれば，この「海上の道」もヤギに関するかぎり，稲作の渡来などにくらべ，はるかに新しい道であったということになろう。

家畜ヤギの性格

家畜系統史の研究者は，個々の家畜種と飼養文化がどのように伝播し，現在にいたったのかに強い関心をもつ。ヤギの場合，全世界に広い分布をもつにいたった原動力は，モヘアやカシミヤ織りの原料となる毛が珍重されたからではない。「貧者の乳牛」として，濃厚な乳を出すということがひとつ，それから肉畜としても価値が高かったことがあげられる。

もうひとつ忘れてならぬことは，ヤギがきわめて多様な環境条件に対し幅広い適応能力を有していることであろう。畜産学のことばを使えば，粗放な飼養管理に耐えうる家畜であること，いやむしろ，飼い主である人の手を離れてもけっこうひとりでやってゆける能力は，近縁のヒツジとくらべても対照的といえよう。

太平洋のまん中にあるハワイ諸島では，ヤギが山野に野生化して植生破壊の主犯になっている。ここではクック船長，バンクーバー船長など，初期の西洋人航海者が島の酋長に親善の目的でヤギを贈ったことが記録に残っているが，これも遠洋航海の非常用食糧を，必要がなくなったので陸あげしたというのが真相らしい。

先般日本へ復帰した小笠原諸島にも同様のことがある。ここでも戦前からヤギは野生化していた。ペリー提督が1853年に寄港したおり陸あげしたのが最初だといわれるが，戦後アメリカの統治下で大幅にふえてしまい，裸山にされてしまった島もある。日本復帰後，小笠原諸島の生物相を調査した学者が口をそろえていうことには，小笠原特産とされた珍しい動植物で絶滅したものが少なくなく，その主因は野生化ヤギの植生破壊であるという。

こうなると，もはや家畜というよりも害獣であって，駆除の対象にしなければならぬのだから困ったものである。広範な適応能力，手のかからない家畜という性格が裏目に出た一例である。

わたしたちは羊毛王国オーストラリアのヒツジの大群の写真に，たびたびお目にかかる。完全に飼いならされ，生きものであることすらやめて，さながら毛の大量生産機械と化したかのごときあのヒツジたちは，ヤギと相前後して西アジアの一角で家畜化された動物である。

ヒツジとヤギは，動物学的には雑種ができるかどうかが問題になるくらい近縁の種でありながら，一方は家畜として大国の経済をささえるまでになり，他方は商工業ベースに乗ることに完全に失敗し，野生化してふえすぎたといっては狩猟の対象になる。本誌におさめられたヤギの美しい肢体の数々に，読者の皆さんは野生の悲哀を感じないであろうか。■

任は飼主にある。

これからも僕は野生の動物をたくさん飼育するつもりだが，家人に言い残している言葉はただ１つである。たとえ僕が食い殺されたって，動物をどうか殺さないでくれ……と。

しかし，動物を手元に置いてみると，動物が殺し合うのはよほどのことだと思うようになった。ことに同種間で闘争し片方が死ぬのは，異例中の異例ではないだろうか。

よくマタギの話を蒐めた本の中に，ヒグマとヒグマが縄張り争いをし，片方が殺されてしまう例があったりする。だが僕には信じられない。耳を食いちぎる位のことはあるかもしれないが，殺すまでケンカをしていたら，自ら首をしめ，生きのびるチャンスを失ってしまう。そういう浪費を好まないのが自然ではないだろうか。

さて，問題のノーファウルカップであるが，結局僕は買わずじまいだった。愛犬グルとどんべえの遊びを見ていて，ちょっとときたない表現だが，「穴の法則」を発見したからである。

グルは約40キロ。どんべえも約40キロ。やっと体重が同じ位になった。

両者は仲がよく，どんべえが外に出るとしばしばもつれ合って遊ぶようになっていた。グルの得意手は前足によるストレートパンチ。どんべえは前足を人間並みに使い，グルの首を抱いたり，相手の足をかいこんだりした。その際特筆すべきは，クマが決して声を出さないことだ。少々きつく咬まれたって，振りほどいてじゃれかかっていった。



仲のよいどんべえとグルは，しばしばもつれ合って遊んだ

しかし，グルの方はだらしなかった。耳や足をきつく咬まれると，

――キャイン。

と，細い声を上げて抗議した。

でも本当のケンカになったらグルの方が強いだろう。どんべえの動作はまだあどけないし，グルには獲物を追うすばしっこさがあった。だから遊びがしだいにエスカレートすると，逃げるのは決まってどんべえだった。グルに追いつめられて海の中に入り，半ば水に体を浸して走り回った。

その遊びを見ていて，第一に気がついたのは，決して口と口で咬み合わぬことだ。両方が口を大きく開け，合わせることはよく見られた。それは遊びの中の儀式みたいなもので，僕は〝口合わせ〟と呼んだが，どちらかが急に閉じて相手を傷つけたりはしなかった。

と同時に，肛門と生殖器に歯を立てぬのも驚きだった。のべ時間にすると大変長い間グルとどんべえはからみ合っているのだが，その間一度も，口や目，肛門や生殖器には傷がつかないのである。

長い毛で守られてはいないので，むしろ傷ついて当然だとも言える。しかし，事実は逆なのである。

これは多産の動物についても同じことが言えるかもしれぬ。たとえばイヌの子などをごちゃごちゃ一緒に飼っていても，目や口，睾丸や陰茎には傷がないではないか。

僕は弟にこっそり意見をきいてみた。

「いいかい，食物が入る穴，出る穴，その周辺には大切な器官が集められている。目や鼻がそうだし，睾丸もそうだ。穴には特殊な匂いがあるし，それによって守られているのじゃないかな。つまりだな，よほどいきりたっていない限り，前後の穴の周辺には歯を立てないのじゃないだろうか」

「そうさな」

と，弟も同意した。

「おれも不思議には思っていた。何かありそうだよ，な」

こうなったら，実験あるのみである。僕はグルのまねしてみようと考え始めていた。■

十二支の話

2

子（ねずみ）

竹内照夫

むかし日本や中国，朝鮮などで使われていた暦（こよみ），すなわち〝旧暦〟によると，ことし（昭和47年・1972）は壬子（みずのえ・ね）の年である。古い運勢判断の本を見ると，「子の年生まれの人は，気が短く行動がせせこましく，仕事を成し終えたかと思うとすぐに失敗を招き，安定しない。人のせわをやきたがるが，自分は家庭の縁が薄くて，孤独になりやすい……」などとあって，何となくねずみの習性を念頭に浮かべての予言のように感じられる。



さて去年を辛亥（かのと・い）とし，ことしを壬子とするが，この辛亥とか壬子とかは，前号で話したように，旧暦上で干支と称する年月日および時刻に対する序列記号であった。そのうち十二支には特に12種の動物が対応させられているが，これは本質的には暦術に関係のない，神秘的な予言思想の産物である。しかし，一度こうした設定が始まって，長く続くうちには，これに関連するいろいろな習俗や伝説，信仰などができあがる。その例を挙げてみよう。

正月の門松　わが国の奈良・平安朝のむかしには，正月の最初の子の日に，人びとが野山に遊び小松を引き抜いて持ち帰り，これを家の門口や庭などに植える，という習俗があり，これが後世には正月の門松になった。

え　阿部隆夫

この習俗の内容は，一層古くは，引いて持ち帰った小松を手ぼうきに使って，儀式的に養蚕室の掃除をし，これからさきこの室にねずみが来ないように，とのまじないにしたのである。つまり，小松引きは単なる正月の遊びではなく，生産上の福利を祈る儀式であったわけであり，また，ねずみの害が人間生活に久しいものであることの証拠でもあった。

この習俗のもっと古い形は，実は中国の古代に見られる。その頃の中国では，正月の最初の子の日に田畑の枯草を焼き立てる習慣があって，これは主として野ねずみを駆逐して，作物の害を避けるのが目的であった。これが朝鮮を経て日本に入った，と伝えられる。

この作業は何の日に催してもいいわけだが，ちょうど十二支中にねずみがあるから，それにちなんで子の日に行なうことになったものであろう。わが国の場合は，野焼きをも行なったのだろうが，ついでに常緑樹の小松を間抜（かんばつ）して帰り，養蚕のためのねずみ払いとか，あるいは門口に植えて家の繁栄を祈るとかの，まじないに用いたわけである。

甲子大黒（きのえねだいこく）　旧暦の11月に甲子の日があればその日，また甲子がなければ最初の子の日には，にぎやかに大黒天の祭りの行なわれるのが江戸時代の風俗であった。旧暦では，11月は



子の月という定めであるから，その月の子の日ならば子が重なり，ねずみを支配する大黒天を祭るのに最もふさわしい日，と信ぜられていたのである。

大黒天は，仏教に伴われて伝来したインドの諸神の一種で，いつしか台所の守り神となってねずみと関連を生じ，ついにねずみはこの神の眷族（けんぞく・家の子郎党）となった。つまり，ねずみに手を焼いた人間たちは，大黒天をあがめて，ねずみの制御をこの神さまに一任したのである。しかもダイコクの字音は，日本神話中の大国主命（おおくにぬしのみこと）の大国（だいこく）にも通じるところから，やがて二神は合体して〝だいこくさま〟という福の神になったものである。ねずみは有害の動物として憎まれる反面で，福の神のお供として愛重され，ついには〝きのえねさま〟として，大黒神から遊離した一種のマスコットにもなったのだ。■　（中国文学者）



読者のアルバム　9

スイスのデパートで

写真と文　新沼次郎

過日ヨーロッパを旅行した際，ストックホルムの地下鉄では，クマのように大きなイヌが座席の下にもぐりこんでいたり，また，ローザンヌのホテルでは，愛犬といっしょに泊まっている紳士淑女が，ワン公殿を連れてじゅうたんの上を大いばりで歩いていた。

わたしは，ヨーロッパ人と日本人を比較して，動物愛護の精神をうんぬんすることは好きではない。しょせんは，牧畜民族と農耕民族を祖先とする国民性の違いなのだと思っている。

それにしても，チューリッヒのグローブスというデパートの側壁に，イヌつなぎ用の金具が設けてあったのにはびっくりした。なんとまあ，人の心のいきとどいていることよ。もちろん，スイスのデパートでは人間の子どもを預かる託児室のほうも，完備していたことをつけ加えておく。■　（神奈川県・48歳・自由業）

仲間のひろば

野生動物の保護とは

今，世界のいたる所で野生動物の保護が叫ばれているようです。このことは，現代の人間が，社会，文化の進歩とともに，自分のまわりに自然を求めていることを示すものでしょう。その自然の確保のためにいちばんてっとりばやい方法として，動物を保護するようになったのだと思います。

ところで，動物の生活の場は動物園のおりではなく，たとえばライオンをとりあげてもわかるように，かれらは自然の状態ではサバンナという大草原を生活の場としています。そこでかれらを保護するには，かれらの生活の場であるサバンナを確保してやらなければなりません。他の動物についてもそれぞれの生活の場を確保するとすれば，動物保護は植物を含めた自然界のあらゆる生物の保護につながるはずです。

しかし，今の人びとはただばく然と動物を保護しようと考えているようです。『世界動物百科』には動物の自然の状態が生き生きとした姿で描かれています。この百科は現代の文明社会に生きる人びとに対し，自然を保護する思想を助長してくれるものと信じております。■

（名古屋市・林輝昭・17歳・高校生）

キレンジャクの渡来

キレンジャクは冬鳥で，毎年ぼくの家近くにやってくる。特徴は尾の先が黄色で頭の毛がちょんと立っていることだ。よく木の実を食べているのを見かける。近くへ寄ってもあまり逃げようとはしない。

キレンジャクは北半球北部で繁殖する。いつもなら11月ごろから見かけるのだが，去年は2月の末にやってきた。ときどき群れをなして飛んだり，住宅のアンテナにびっしりとまっている。20羽ぐらいで飛んでいることもある。また，よく道路の横にたまった雨水などを飲んでいる。キレンジャクを見る機会が日増しに多くなっているが，たいていは住宅のアンテナである。■　（北海道苫小牧市・鹿毛不二彦・11歳・小学生）

ペット相談室



担当　高橋達志郎

〈問〉　レース鳩を飼って，レースに出場させたいと思いますが，どのようにしたらよいのでしょうか。また，かかりやすい病気とその治療法を教えてください。

（高崎市・森島広通・15歳・学生）

〈答〉　レース鳩を飼育する場合は，一般のペットとして飼育している小鳥と違って，レースに出して勝つという目的があるわけです。優秀な選手鳩をつくるためには，系統がたいへん重要視されるわけで，種禽の選定や日ごろの健康管理，訓練の方法などが重要なかぎになります。

具体的な飼い方は，飼う人の環境や能力が異なるので，各人がもよりのレース鳩クラブの先輩に，直接指導してもらったほうがよいでしょう。

以下には，巣引き中やひなに発生しやすい病気に限って述べてみます。

▶鳩トリコモナス症

鳩トリコモナス原虫によって発症する病気で，親鳩がこれに感染していると，育雛中に経口的にひなに感染します。親鳥は感染していても，抵抗力があるために原虫の数がある量でおさえられていますが，抵抗力の弱いひなの嗉嚢の中では異常に増殖し，口内や食道にまで潰瘍を生じ，細菌の二次感染により病状は悪化します。ひなは採餌ができなくなり，口内や鼻孔より悪臭のある分泌物を出し，やせて落鳥します。

治療には，よほど早期に発見して，過マンガン酸カリの0.05パーセント溶液で嗉嚢を洗浄し，0.5パーセントのサルファ剤を7～10日間連続内服させると効果があります。

もちろん，症状が重いものにはいろいろ注射をすることもありますが，口内の膿塊をピンセットで取り除いたり，ルゴールやヨードチンキを口内に塗ったりするのはあまり効果がなく，いたずらに出血を起こさせて危険な場合があります。

▶栄養性脚弱症

飼育管理のうえで，鉱物質などの栄養素が不足したときや，完全に親鳥としての充実した体力をもたないうちに巣引きをしてできたひな，また親鳥の体調のよくないときにできたひな，育雛のへたな親鳥に育てられたひななどに発症する病気です。栄養不良や栄養失調のために，骨の形成がふじゅうぶんになり，骨の一部がはれあがったり，曲がったり，神経麻痺を起こして起立不能やびっこになる症状を呈します。

早期に発見できれば，飲み水などに総合ビタミン剤などを加えたり，注射したりすることが有効ですが，治療よりも早くその原因を調べ，原因を除去するようつとめるべきです。

鉱物質の補給には塩土とか，小鳥屋で売っているプラスリンなどがあります。ビタミンの補給には青菜類をきざんで平常は週に1回ほど与え，巣引き中は1日おきぐらいに与えたらよいでしょう。

▶鳩　痘

鳩痘ビールスにより発症します。年によって発生状況がまちまちで，多発する年とそうでない年があるようです。

夏の終わりごろから，ぼつぼつ蚊によって媒介されるわけですが，1年未満の鳩に発生し，とくに巣立ち前後のひなに多発します。

はじめ，眼瞼やくちばし，脚の無毛部にポツンと小さいおできができ，それを掻きこわしたり，つっついたりしているうちに，だんだん数がふえ，二次感染により膿瘍になることもあります。巣びななどは，羽毛が少ないためか，全身にできることもあります。

粘膜をおかされると，口内炎を起こし，他の疾病とまちがえることもあります。やたらにピンセットなどでつっつきますと，かえってビールスをまきちらし，病勢をひろげる結果になります。

発痘の少ないうちに，硝酸銀棒などで焼いてしまうとよいのですが，口内などに使用したときは中毒に気をつけ，食塩水で洗ってやる必要があり，その他，細菌の二次感染には内服や注射の必要なときもあります。■　（小鳥の病院院長）

裏表紙説明

トビ　子どもたちを翼の下に隠し，周囲に目を光らせている母親トビ。巣を守る本能は強く，人間が巣の下を通っただけで攻撃してくることがある。翼の長さ48センチほどという大型の鳥なので，巣も直径45～80センチという，巨大なものをつくる。出産の前には，毛くず，糸くず，新聞紙，古手ぬぐいまで拾い集めて，巣の中に敷きつめる。

上空を口笛のような鳴き声をたてての んびりと舞う姿は，漁村ではよく見かける。獲物を見つけると，急降下してすばやくさらっていく。ネズミや魚の死骸が好物だが，「トンビに油揚げをさらわれる」こともよくある事実だという。

「トビが朝鳴くと雨」とか「夕べに鳴くと翌日は晴れ」とかいわれて，そのとおりになることもあるが，「トビがタカを生む」ことはない。■　撮影　岩合徳光

▶おことわり　本号『もうひとつの世界』『漢字のふるさと』は休載します



1450年代
板絵
183×319.5センチ
ロンドン　ナショナル・ギャラリー

サン・ロマーノの戦い

パオロ・ウッチェルロ

ルネッサンス期のフィレンツェの画家ウッチェルロには，有名な「戦闘図」が３点ある。いずれもほぼ同じような横長の構図で，現在はパリのルーブル美術館，フィレンツェのウフィツィ美術館，そしてロンドンのナショナル・ギャラリーに別々に保存されているが，もともとは一連の続きのもので，15世紀におけるフィレンツェの指導者として名高いロレンツォ・デ・メディチの邸(やしき)に飾ってあったという。

描き出されている「戦闘」が，何の戦争であったかということについては，いろいろ意見があるが，今では1432年にフィレンツェとシエナが戦った時の，サン・ロマーノの戦闘のエピソードであろうというのが，大体定説になっている。このロンドンの作品では，中央の白馬にまたがって指揮棒をふりかざしているのが，フィレンツェ軍の司令官ニッコロ・ダ・トレンティノであろうといわれている。

いずれにしても，馬に乗った大勢の兵士たちを画面いっぱいに配置するその構成法は，細部をたんねんに描き出す素朴な写実的表現への意志とともに，画面に華(はな)やかな魅力を与えている。特に前脚(まえあし)を高くあげた馬で形作られる前景のリズムは，芝居の舞台を見るような賑(にぎ)わしさがある。この華やかな騎馬姿を，ほぼ１世紀ほど後に描かれたわが国の王侯騎馬図（南蛮美術館）などと比較してみるのも興味深いことであろう。■

（高階秀爾）

第１号～第64号（概説・哺乳類）のおもな内容

◉ 数字は号数，白ぬき数字は既刊

❶概説Ｉ　生態学，自然保護
❷概説II　動物分類学，生物学的環境
❸霊長目　ゴリラ
❹霊長目　チンパンジー，オランウータン
❺霊長目　テナガザル，オナガザル
❻霊長目　カニクイザル，ヒヒ
❼霊長目　キヌザル，オマキザル
❽霊長目　メガネザル，キツネザル，アイアイ
❾食虫目　ツパイ，モグラ，ハリネズミ
❿翼手目，皮翼目　コウモリ，ヒヨケザル
⓫齧歯目　ヤマアラシ，チンチラ，ミズブタ
⓬齧歯目　トビネズミ，ヤマネ
⓭齧歯目　家ネズミ，野ネズミ
⓮齧歯目　レミング，ビーバー，ハムスター
⓯齧歯目　リス，ムササビ
⓰齧歯目　ウサギ
⓱食肉目　チーター，ライオン
⓲食肉目　トラ
⓳食肉目　ヒョウ，ジャガー
⓴食肉目　ピューマ，ヤマネコ
㉑食肉目　イエネコ
㉒食肉目　ハイエナ，マングース
㉓食肉目　ジェネット，カワウソ
㉔食肉目　スカンク，アナグマ
㉕食肉目　テン，クロテン
㉖食肉目　ミンク，イタチ
㉗食肉目　パンダ，アライグマ
㉘食肉目　マレーグマ，ホッキョクグマ
㉙食肉目　ヒグマ，ツキノワグマ
㉚食肉目（家犬）　イヌ概説，盲導犬，警察犬
㉛食肉目（猟犬）　グレーハウンド，セッター
㉜食肉目（番犬）　日本犬，セントバーナード
㉝食肉目（愛玩犬）　スピッツ，チワワ
㉞食肉目（野生犬）　ディンゴ，リカオン
㉟食肉目　キツネ，ホッキョクギツネ
㊱食肉目　オオカミ，コヨテ
㊲食肉目　アザラシ
㊳食肉目　セイウチ，オットセイ，トド
㊴奇蹄目　サイ，バク
㊵奇蹄目　ウマ概説
㊶奇蹄目　サラブレッド，ポニー
㊷奇蹄目　ロバ，ラバ，シマウマ
㊸岩狸目，長鼻目　イワダヌキ，ゾウ
㊹偶蹄目　ヒツジ
㊺偶蹄目　バーバリシープ，アイベックス
㊻偶蹄目　ヤギ，カモシカ
㊼偶蹄目　ガゼル，インパラ
㊽偶蹄目　ブラックバック，ヌー
㊾偶蹄目　ローンアンテロープ，ダイカー
㊿偶蹄目　バイソン，アフリカスイギュウ
(51)偶蹄目　ウシ，スイギュウ
(52)偶蹄目　イランド，ブッシュバック
(53)偶蹄目　キリン，オカピ，ノロジカ
(54)偶蹄目　トナカイ，ヘラジカ
(55)偶蹄目　アカシカ，マメジカ
(56)偶蹄目　ラクダ，ラマ
(57)偶蹄目　カバ，ペッカリー
(58)偶蹄目　イノシシ，ブタ
(59)貧歯目，有鱗目，管歯目　アリクイほか
(60)海牛目，鯨目　ジュゴン，ナガスクジラ
(61)鯨　目　イルカ，マッコウクジラ
(62)有袋目　カンガルー，コアラ
(63)有袋目　バンディクート，フクロネコ
(64)単孔目　カモノハシ，ハリモグラ
以下(65)～(128)　鳥類　(129)～(144)　両生類，爬虫類
(145)～(160)　魚類　(161)～(192)　昆虫類，甲殻類

世界動物百科　通巻46号　昭和47年2月6日発行　（毎日曜日発行）　編集・発行人　大田信男　発行所　朝日新聞社　東京　大阪　北九州　名古屋　印刷・凸版印刷　**定価220円**



トビ　説明 30ページ

雑誌 0631－2／6